家庭雜誌

第參拾六號

小見の自治　自治の心は大國民さなる始なり。

岐阜提燈の化學　學ぶべき事は何れの處にもあり。

修羅塲裡の天使　見よや彼小さき蠟燭如何に遠き光を放つよ、邪なる世に善行の輝くも亦斯くの如し。

賤しくて貴し　獨り江に映ろふも、月影は清し。

エリザベス、ロブーロフ　彼女の心の雄々しさよ。

國民新聞

（如何にして日淸大戰爭を報ずるか）

爲すこと多く爲さんと欲すること多き多忙の人は多くの時を讀むことに費す能はず、多くの時を費さずして、而も最も多くのことを、最も迅速に、最も精密に、最も確實に知らんと欲す。『鴨綠江、楊子江の大河流は終に大海に注き、東洋の大潮流は東學黨の亂に起つて、終に日淸の大戰爭、兩國の運命を決すべき大戰爭の大舞臺に入れり。我が日本全國を擧げて、今や、爲さんと欲すること多く、爲すこと多き最も多忙の國民となれり。

國民新聞は此の多忙の國民、多くの時を費さずして最も多くのことを最も迅速に、最も確實に知らんとする國民の新聞たることを期す。

國民新聞は多くの通信員を派出したり。

在京城　菊地謙讓　久保田米齋　天涯生

在仁川　愛民生　在釜山　鑑湖生

長風生菊地氏の半島に於ける政治家、黨派、改革を報ずる諸通信、米齋氏の京城畫報、從軍畫報、天涯生の社交上の通信、愛民生の仁川通信、既に讀者の知れる所（天涯生と愛民生鑑湖生との名は未だ明す能はず）。今や、戰機熟したり、

我が社は更に左の通信員を派遣す。

從軍　久保田米僊　阿部充家

朝鮮內地探撿　松原岩五郎　在馬關　平田久

米僊畫伯は曩きに米齋氏と父子相携へて入韓せしが、從軍の便宜を得ん爲め一たび歸り來り、更に阿部氏と相携へ、我が軍隊に從ひ、軍隊の進む處まで、一は畫の筆、一は文の筆を携へて進み、乾坤の一布衣松原氏は最暗黑の東京を書きたる筆によつて、最暗黑の朝鮮探撿記を報じ、平田氏は緊要なる馬關の地にあつて緊要のことを敏速に報ずべし。新通信員は既にその地に達したり朝鮮出兵を第一に論じたる國民新聞、豐島海戰を第一に報じたる國民新聞は此の如くにして、多忙なる國民に、最近の出來事を、最も迅速に、而も最も精確に報ぜんことを期す。所期果して達すや、否や、請ふ今後の國民新聞に徵せよ。

定價一ヶ月卅五錢、三ヶ月壹圓、東京市外郵稅一ヶ月ニ付拾三錢ッ、◉廣告料一行金拾三錢

發行所　東京市京橋區日吉町　國民新聞社

◉◉牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

此スコツト乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル様ニ調化シアルモノナリ

◉筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコツト乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

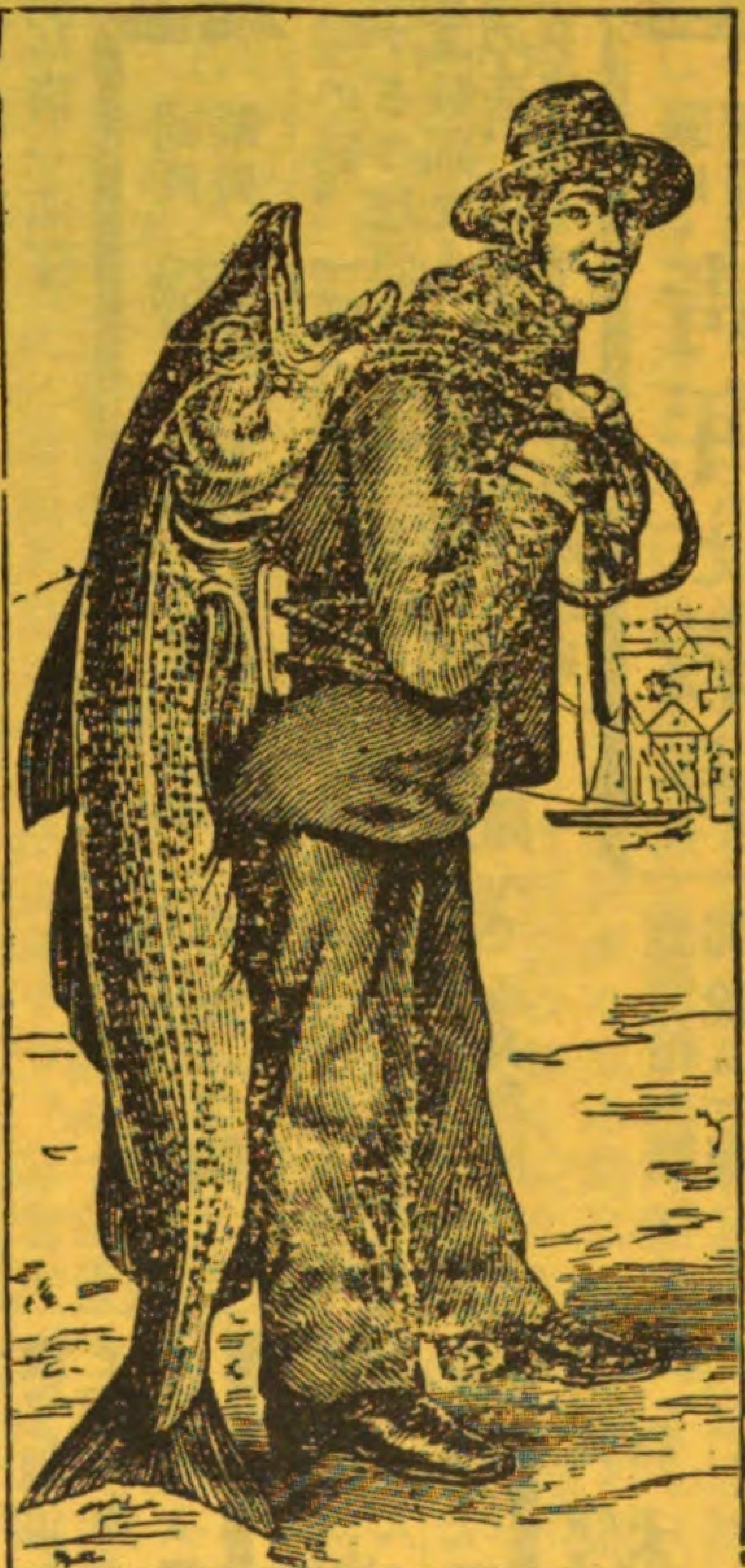
◉龍動スコツト及バウン謹製

日本一手特約販賣所

米國貿易商會

横濱廿八番
神戸十七番

◉賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコツト乳菓

德富猪一郎著

國民叢書

天然と人

定價二十錢
郵税　四錢

各新聞雜誌の批評

●何んぞ其題名の快ちよきや、夏に際して讀まざる可らざる可らざる心地す。何れも、一度は見たるものゝ編輯に過ぎざれど、國民新聞に出し所云る傍觀傍聽記か、德富君の筆に成りしとは意はざりき。之のみ眼を刮つて新らしく再讀し、今尚ほ鮮味を感ずるなり。(女學雜誌)●國民新聞と國民之友に連掲せし紀行と議會の面白き議事を集錄せしものなり定價二十錢の厚き小冊子なりと雖ども之を繙けば自から夏の長き日を忘るべし(都)●「天然と人」は民友記者德富蘇峯が隨見隨錄なり故に境により處に依りて筆に曲折多く其の幽なるものは深谷の如く其の奇なるものは夏雲の如く尖なるもの鋭なるもの交互錯綜として其の觀を擅にす綠陰清蟄竹床に仰臥して快讀一番す暑魔驚き去ること三千里(新朝野)●國民新聞に連載せる蘇峯生の記事之を集めて、一卷と爲せるものなり、北窓綠濃なる邊、仰臥此書を播かば、九十度以上の熱をも忘れん、日清の大戰爭を忘れん、實に是れ一包の清涼劑なり、心理的銷夏秘法なり。(敎育時論)●いつ讀でも厭くよを覺へざるは蘇峯氏の文なり清風裏藤榻に臥しながら此書を讀んで華胥國に遊ぶは豈に心理的銷夏の最上法に非ずや、著者が此の書を著はすの意も此れに外ならざる也(經濟雜誌)

内田不知庵著

十二文豪號外

ジヨンソン

定價　廿錢
郵税　四錢

各新聞の批評

●十八世紀英國文學界の眞誠男子硬骨なる文豪ジヨンソン氏の性行實歷を敍したるものなり故に本書を見ればジヨンソン其人を想見すると共に英國十八世紀の文學をも概見するを得るなり操觚者たるもの一本を坐右に具へざるべからず(毎日)●此書は十二文豪號外にして内田貢氏の著也試みに讀み去る吾人は未だジヨンソンの生涯を盡したりと認むる能はず然れどもジヨンソンの行實は稍ゝ寫し得たりと信ず今の文學に志す者幸に之を讀んで身の程を知れ(めざまし)●十二文豪の號外として民友社より發行せり夫れジヨンソンは第十八世紀の巨人たることは人皆な之を知る然れども其行實と其著作の眞價とを知らんとする者は此書を讀むに如くは無し(都)●學者としてジヨンソン我輩之れを知る偉人としての彼れ亦我輩之れを追慕す本書は簡潔に而白く斯人を寫し出せしものなり午睡の代りに讀んで見よ得る所また尠少ならざるべし(二六)●奇偉卓落の文豪ジヨンソンは内田氏の靈腕によりて遺憾なく紹介せられたり余輩は此の書に依りて此の文豪若くは文豪以上の巨人を我文界に見んと望むものなり想ふに著者其人は心竊に之を擬せんと望むものにあらずや(新朝野)

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

平民叢書完結廣告

平民叢書第十卷

白皙人種の前途

定價拾二錢　郵稅二錢

目錄◉緒論◉第一人種◎(一)世界は白皙人種の專有たる可き乎◎(二)濠洲の勞働問題◎(三)亞非利加に於ける白皙人種◎(四)支那人及印度人◎(五)亞米利加に於ける白皙人種◎(六)世界は白皙人種の專有たる可き乎◉第二、社會◎(一)膨脹の停止と社會の變革○一、未開人種の驅逐と文明の壽命○二、過剩人口の處分と國家社會主義○三、將來の社會的狀態◎(二)文明社會の危險○一、軍備及戰爭○二、大部府の生長○三、公債の增加◎(三)國民的精神○一、國民的精神の必要○二、國家と教會○三、國民的精神の發達◉第三、家族◎(一)家族專制◎(二)個人主義、家族主義及び國家主義◉第四、品性◎(一)國家社會主義の影響◎(二)將來の宗教◎(三)將來の科學◎(四)將來の文藝◎(六)社會の老齡

平民叢書は今や終結に達せり。我社は本卷に於て、近時歐洲社會を聳動せんとする破天荒の珍書を紹介し、以て讀者從來の愛顧に酬る所あらんと欲す。總て他の人種を壓倒して世界を專有す可しとは、人種の高慢に充ちたる白皙人種の諸國民が夢想する所にして、我國民一部の自稱學者輩の如き、また其高言に聞き怯ぢて、選擧恭縮自ら事とせんとするものあり。安ぞ知らん、歐洲人士の中、偏僻なる俗流、齷齪たる政治家の群を拔き、公平冷靜なる識見を以て彼等が夢想の妄誕なるを論破するものあらんとは。本書、白皙人種の膨脹は久しからずして停止の運命を免かれずといふに論を起し、黃黑諸人種の壓迫益〻逼急を致さんとするの形勢を說き、社會、家族品性の上に於ける其影響を詳究して、白皙人種は既に老齡に近けりと斷案す。其識見の如何に該博にして、其包括の如何に濶大なるかは前揭の目錄、以て其一斑を想見するに足る可し。今や我國民、東洋の一隅より起つて、大々的日本を世界に打ち建つ可き時機に會す。此時に當り、此書を讀んで白皙人種の盛運の既に末路に近くを知らば、血涌き肉動くの感を生ずる將た幾何ぞ。

◎第一卷	十九世紀之大勢	定價十二錢　郵稅二錢
◎第二卷	世界經濟上之變動	定價十二錢　郵稅二錢
◎第三卷	國家と政府	定價十二錢　郵稅二錢
◎第四卷	教育と遺傳	定價十二錢　郵稅二錢
◎第五卷	文明之獘及其救治	定價十二錢　郵稅二錢
◎第六卷	現時之社會主義	定價十二錢　郵稅二錢
◎第七卷	經濟と道德	定價十二錢　郵稅二錢
◎第八卷	歷史攻究法	定價十二錢　郵稅二錢
◎第九卷	哲學變遷史	定價十二錢　郵稅二錢
◎號外	銀貨之過去現在未來	定價十二錢　郵稅二錢
◎號外	責任內閣	定價十二錢　郵稅二錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

國民的問題は國民にのみ訴へて可なり**世界的問題**は世界に訴へざる可らず**日清事件**は**世界的**なり故に我國民之友は日本國内の購讀者のみに甘んずる能はず本號には**日清事件**に關する**英文**の**寄書二題**を掲載せり、

THE NATION'S FRIEND

國民之友

廣告

毎月三回 定價六錢

第貳百卅三號

（定價一冊金六錢十冊前金六十錢二十冊同一圓十錢市外郵税五厘宛）

國民の友○○**吾人の志を明にす**○○**日清の事局を結ぶの策如何**○○**對外自主派の本領**

（特）（別）寄書○○JUSTIFICATION OF THE COREAN WAR: KANZO UCHIMURA.—TWO CONTRASTING PROCLAMATIONS: E. H. HOUSE

（雜）（錄）○○**軍事雜話**（一）

（史）（論）○○**國民的詩人**（九）平田生

（批）（評）○史海○地理學講義○支那文明論○黒死病論○○**宋學概論**山路生○近刊雜書

（當）（今）之問題（海）（外）思潮○○**埃及に於ける英佛**外六件

（時）（事）**時事數十件**政治教育宗教文學科學社會の區劃ミ精明○海外時事○經濟事情○時事日記

（廣告料一行五號活字二十四字詰金十五錢行數回數に依り割引あり）

八月廿三日發兌

東京 **民友社** 發行

夏期大附錄は本號に添へたり**恩愛刄**は菽の家主人が優婉の文を以て壯烈の事を叙し少女手裏の霜刄夏なほ寒し、**流竄錄**は内村鑑三氏の回顧錄にして其白痴の教育は至誠白痴をも動かしたる處惻々人を動かす、**靴師**は小西増太郎氏露國の文豪トルストイを譯して愛の在るところに神在りとの理想全篇に溢る、**司馬江漢**の**世界觀**は大西祝氏が司馬江漢の厭世的思想のショペンハウエルに酷肖せるとを縱横論叙して明快透徹毫末も遺憾なし、

竹越與三郎著

支那論

近刊

我艦隊一たび南陽灣に入れば、清艦或は降り、或は走り、或は沈む。我陸軍一たび牙山に向へば、清國無匹の精兵、震懾營を捨てゝ逃る。思ふに我軍長驅して北京の宮殿に日章の旗を飜すの日また遠きにあらざるべし。歡喜に醉へる國民は唯だ其の同情を軍隊に寄するの外なし。**何故に支那と征伐**せざるべからざるかと云ふの一問に逢へば即ち彼れ朝鮮に於て我施設を妨げたるが故なりと云ふの外あるなし。然れども吾人が支那を征伐せざるべからざるの**理由**何ぞ必しも此に止らん耶。**人種の上**よりも、**國家の關係**よりも、**文明の爲**めにも、**自衛の爲**めにも、將た天下に**『大なる日本』**を建てんがためにも支那は**到底**、之を**征服**せざるべからず。**朝鮮事件**の如きは是れ其の**機會**に過ぎざる也。此書、日本國民の胸中に蟠る**支那征伐の大理由**を闡明して餘蘊なし。

已に支那を征伐す、何を以て**其の局**を**結**ぶべき乎。已に結局に近づくとき、彼若し我**要求**に**應**ぜずんば、如何にして處せん乎。是れ**獨り兵力**にのみ**依頼**すべからず、更に**一轉して外交の力**によらざるべからず。**『支那論』**は國民に代つて**戰後の要償**を論ずるのみならず、また如何にして此**要償を得**べき乎を論ず、**其眼界廣きが故に論局もまた大**。儒生の迂論にあらずして活ける識見也。若し大膽なる政治家ありて之を實行せば、豈に獨り支那征伐のみならん耶。世界に『大なる日本』を建つるの大業また此に舉らん

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一 一冊	金五錢	金五錢五厘
一 半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一 一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 有馬俊彦
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年八月廿五日發行

家庭雜誌第參拾六號

目錄

長吉……………………………………《久保田金仙畫》

社說

小兒の自治……………………………………………一

科學

岐阜提燈の化學……………………………………三

史談

修羅場裡の天使(上)………………………………九

文藝

賤しくて貴し……………………筑峯女史…一二

家政

己れの心に一鞭を加へよ…………………………一四

蚊のはなし…………………………………………一六

料理法………………………………………………一八

白瓜の卵燒

玉葱

鷄肉の調和煮

かすてら卵子

卯花卵

赤兒と冷水浴………………………………………二〇

惡しき書物…………………………………………二三

婦人職業案內………………………………………二三

產婆業

毛絲案內……………………………………………二四

帆立貝及其細工(續)

下駄塗の汚穢を除く法

新染物法

社交一斑……………………………………………二七

雜錄

流行の栞…………………………………春夢…二七

安價の根懸

懷中香水箱

流行の花

流行の圖書

七寶燒

日用品物價…………………………………………三二

エリザベス、ロプーロフ(上)……………無一生…三三

熱氷飛瀑の奇觀……………………………………三五

征戰幻燈……………………………………………三六

長吉…………………………………………………三九

時事一斑

學海の潮勢…………………………………………四〇

學問普及の度幾何…………………………………四〇

健全なる體力………………………………………四一

發明に關する小さき理想…………………………四一

教科書撿定…………………………………………四二

勤と儉………………………………………………四二

戰時の慈善事業……………………………………四三

朝鮮の社會的改革…………………………………四三

遠征教育隊…………………………………………四三

囚人と書信…………………………………………四四

視力の遞減…………………………………………四四

無聲無烟火藥………………………………………四四

土俗の研究…………………………………………四四

青山醫學博士………………………………………四五

世界の大都府………………………………………四五

世界の鐵道…………………………………………四五



家庭雜誌第參拾六號

（明治二十七年八月廿五日發兌）

社說

小兒の自治

何れの時代にても、人民に自治の心なくして善き道理はなけれども、取りわけ今日以後の時勢は、何事につけても、自治の世なるが故に、小兒の時よりして、自治の習慣をつくる事、極めて肝要也。

自治とは己の事は、己れ自ら爲して、他人に厄介をかけぬ事にして、また之を他の半面より云へば、己れの事は己れ自ら爲して、他人の干渉を蒙むらぬ事也。一方より言へば自治にして、一方より云へば自主自由也。自治の心は一口に言へば、極めて輕きに似たれども、其の結果は中々廣大にして、一個人にして此心あらば、社會に處して成功すべく、面目ある生活も爲し得べく、他人に厄介をかけぬ獨立の男子たるべく、一國民にして皆な此心あらば、他國の制御を受けず、天晴れなる大國民となる事を得べし。一國民の事はさてをき、一個人として今後の社會に處するには、自治の心は何よりも必要なる事也。

昔しの時勢ならば士農工商、各々常祿ありて、其の家の子弟たるものは、唯だ之を守りて、伸ばすことさへすれば、それにて事足るべく、生活の困難と云ふことは、未だ社會を顚倒騷動せしめずして濟み、萬一、困難の事あれば、親類緣者、さては朋友、鄕黨まで、手を出し合ふて之を救ふ風ありしが故に、自治の必要なく、兎角に依賴主義多く、之がため諺に所謂る『叔父を見れば荷が重ひ』と云ふ樣なる心がけ多かりき。固より時勢相應の心がけなければ、此時はそれにても

すみたれども、今は時勢全く違へり。

如何に違へりと云ふに、今日は貧富處を易ゆること、恰かも飛鳥川の譬の如く、人の移り住ふこと、千里の外は歸るが如くなりたれば、互に依賴し、互に助け合ふの機會と、緣因とを少なくし、兄弟すら相助くるの場合を得ざること多し。此かる時勢にありて、他人の助を待つは、行く水に數かくよりもはかなき事にして、到底、天上天下、唯我一人を恃むの外なきことゝ覺悟せざるべからず。社會に出でゝ、一人前の仕事を爲す時、此かる運命あるものとせば、小兒の時より自治の習慣をつけざるは、恰かも、室咲の花を急に嵐に遇するが如く、親兄の心として、殘酷なりと云はざるべからず。故に幼少より、事每につけて萬事自治の心を習はしむること、決して怠るべからざる親兄の責任と申すべし。

さて小兒の自治心を養ふの手段と申せば、樣々にして、一言につくしがたけれども、一つは小兒自身の事は、自家の責任として、必らず爲さしむる事と、一つは、害なき事は、成るべく傍より之を止めざる事に外ならずと云ふべし。譬へば小兒が學校より歸り來るや、親たるもの、遠來の客をねぎらうが如き調子にて、其の携提物を取りおろし、衣服を着かへしむるなどし、または寢につくとき、下女をして其の床の上下を爲さしむるが如きは、極めて自治政に害あることにして、身につきたる事、部屋の掃除等は、勿論彼自身をして爲さしむるを要す。また小兒に一事を爲すべしと命じたる時は、傍より手傳はず。放擲せしめず、必らず自から全く爲さしむるを怠るべからず。

さてまた一方にては、世の親兄たるもの自治の民たるは、子弟の運命にして、彼等が家を出るや、荒らき風波に遇ふものたることを覺悟せば、其道德修養によくよく注意して、服從、無抵抗の柔德のみを敎へず。其の

意志を强固にして、如何なる事にも容易に動せず。泰山前に崩るゝの場合にも、取り亂だきずして前後を考ふるが如き思慮を養はしむること肝要也。從來道德と云へば、兎角に長者に服從することのみを道德として、道理のある所、必らず遂ぐるを云ふが如き剛德を敎へざりしこそ、日本國民の欠點なれば、今後の子弟敎育、巳に自治にありとすれば、自治に伴ふの道德は、此の剛德にある事かへすぐ〵も忘るべからざる也。剛德の標本としては西國立志篇なんど最も妙なりと云ふべし。今日に於て從來の柔德のみを敎ゆるは是れ單衣を着て寒天に旅行せしむるが如く、時勢に副はざる事也。

科學

岐阜提燈の化學

自然の屋根を形造れる、松の大木の下に、安置せる一脚の椅子あり。今日の暑を忘すれんとして、今しも椅子に倚りたるは、此家の兄なるべし。軒に釣るせる岐阜提灯に、火を點んぜんとして、マチを片手にし、出でたるは其妹なるべし。先程より妹が幾度となく失敗の後、最後に蠟燭を傾ぶけて、漸く火を點ずる樣を、靜かに眺め居たる兄は、妹に向ひ、

兄『花ちやん、お前は何年生に成つたのかネー。

妹『此七月で漸く二年生に成りました。

兄『では化學は未だ習はなかつたろうけれども、其蠟燭が、なぜ幾度點してもつかなくて、終まいに横倒にしたら、火がついたか知つてるかネ。

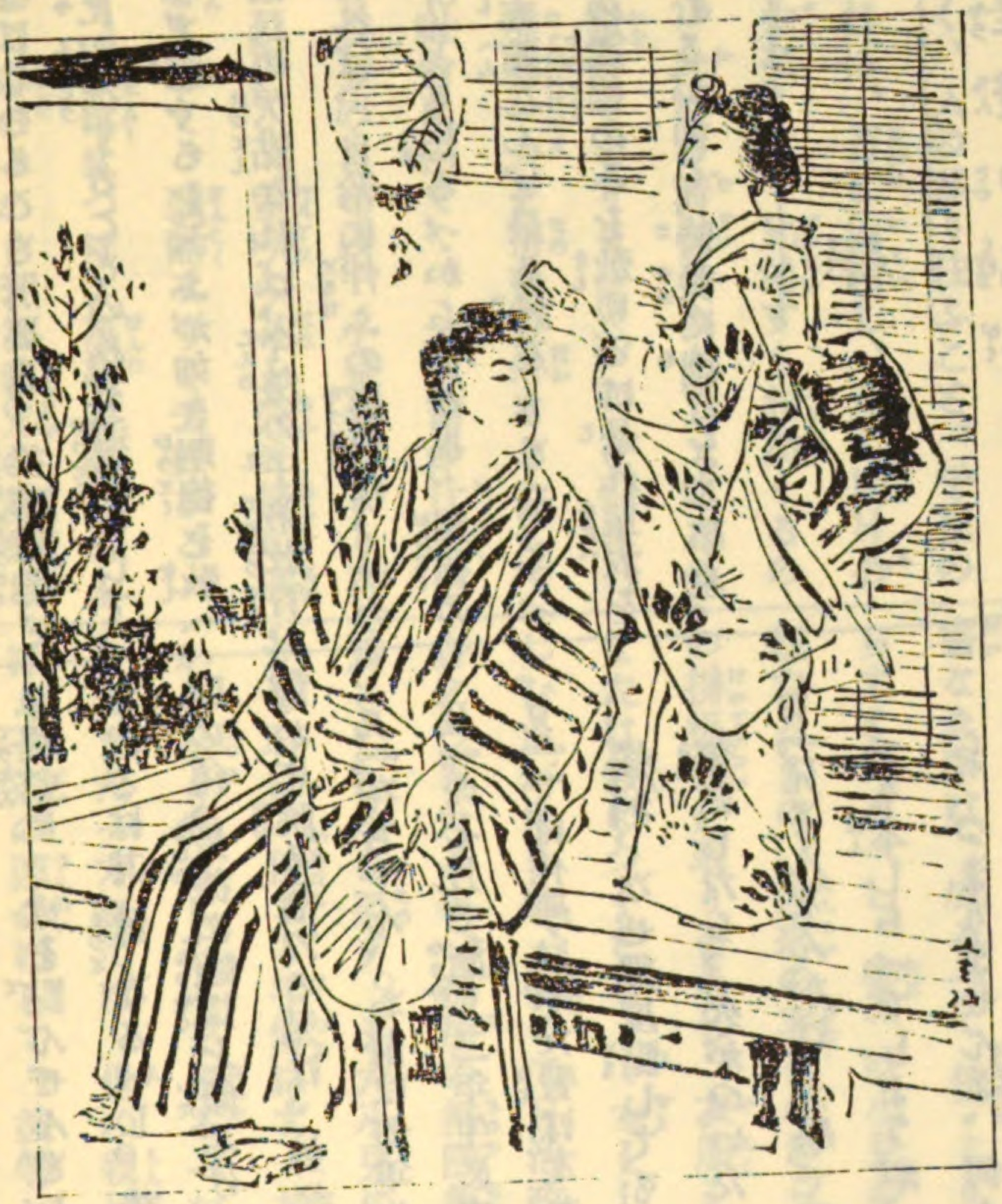
花『兄さんなんかは、大學で器械が自由だから、化學でも本しらべでしようが、私なんぞは、私立だから、つまりませんよ、何んでも間に合せ計りで‥‥‥。

と全く云へ終らざるに、兄は笑ひながら、

兄『ホー驚ろいたネー、器械が、善いめいわくするよ。それが點るか點ぼらないか、聞くのに、器械はいらないよ。

花『だから未云をうと思つて居るのに、兄さんが、遮へぎつておしまいなさいましたもの。火の燃へるのは、酸素だつて、先日先生がおつしやいなさいましたよ、だから蠟燭の燃へるのも酸素でしよう。

兄『又たおまへの談しは、つぼがはづれるよ、凡て火の燃へるのは、酸素にしろ何にしろ、今聞たのは、蠟燭を横倒にせねば、なぜ早く付かないかと云ふわけを聞いたのさ、わからねば敎へてわげるから、一寸持つておいで、おまへの稽古だから。



妹は燃へつゝある蠟燭を片手に携へながら、下駄を穿ち、兄の傍らに行きければ、兄はその中央を指さしつゝ、

兄『こゝの窪んだ處は何故出來たろうか、

花『それは蠟が燃へてなくなつたから、

兄『でも、火は心計りに付いて、蠟に付いては居ないだろう。

花『その心が吸ひ上げるのでしよう。

兄『吸ふには違ひないが、どうして吸うか、知つておいでか。心には、極々細そい穴が澤山あつて、理學上の言葉では、毛細管と云ふが、その穴から蠟を吸ひ上げるのだよ。お前へが臺所で、茶碗の中へコーヒーを入れて、其中へ角砂糖を入れると、砂糖がコーヒーを吸つてしまうだろう、それと同じわけだが、凡て火は、上へ〳〵登るものだから、おまへが、マッチを蠟燭へ付けても、火勢が上へ〳〵と上つてしまうから、蠟燭を横にして、其心をマッチの火の上へもつて來なければ、付かないわけだろう。だが、人は、やたらに火とか、焔とか云ふけれども、本當の焔は、どこだか知つてるか。

花『知つて居ますとも、赤く燃へて居る處が焔です。

兄『そんなら、赤ひ處の中がわになる、鼠色の樣な、青ひ樣な、紫がゝつた樣な色の所は何だ子。

花『焔と云ふ中に、それも一しよに含くんで居りませんの。

兄『馬鹿を云つては困るよ、焔は中が空で圓錐躰の薄すき皮の樣なものだよ。一寸見ると、此の火は平らたい樣だろう、けれども、それは風のためだから、らんぷのほやを被せて御覽、火が眞の形を顯らはして丸くなるよ、そして、中の青ひ樣な、鼠色の樣な所は、心から吸ひ上げた蒸發氣と云ふもので、焔と云ふは、つまり、その蒸發氣が、空氣に觸れるまぎわに、燃へる光りだから、中の蒸發氣と、上の空氣との間に、挾まれた薄すい皮の樣なものさ。若し不審ならばその證據を上げる法があるよ、それは一つの温たかい罎を倒しに向け

て、ゴムの管の一端じを、其中に入れ、今一方の端には、煙管の吸口をさしつなひで、その雁頸を、此の發氣の處へ置けば、その蒸發氣は(或はガスと云つてもいゝが、)煙管を通つて、壜の中の空氣と混和するよ。その壜の中へ火を入れると、パットと云つて爆裂彈の樣な音がするのは、ガスが燃たのさ。

花『面白ふ御座いますヂー、牛乳の壜を持つて來ますから、一寸仕て見せて頂戴ナ、

と云つて花子は立ちかくるを兄は止めて、

兄『明日の晝にしようよ、未だお前に談すとが、澤山あるから、一寸御覽、から火を消すと烟が立つだろう、その上から、烟が上へ登らない樣に、紙を廣ろげて心の一二分上迄下げて來ると、それ火が燃へ出して來た。烟は先き云つたガスだから、溶けた蠟から上ぼつて來る處を、上から遮ぎつてあるから、熱いガスが、蠟の周圍へ溜まつて、蠟を溶かす、溶かされるから又た餘計ガスが出來る、それで相持ちして、だん〳〵熱がひどくなると、火が發する樣になる。

花『兄さんは手品師の樣ですヂー、

兄『今の手品は大抵は西洋から來たものが多くて、皆な理學や、化學を知つて居れば、奇態なとも、不思議なともないとを、素人が知らずと、欺かされるのさ、最も手品は、多少修練の高下があつて、道理計りで行かないともあるが。も一つお前に見せるとがある、蠟燭に風の當らん樣に、袖で圍こんで御覽ん、そして此の紙を一秒か二秒間、火の上に擦る樣に早くのせて急に引き上げると、そら此んなに輪の形が寫るだろう。輪の中が煤ぼけて暗くなつたのは、ガスのせいだ、臺所の天上が、烟むつて、暗くなると、同じわけだ。

花『兄さんの様な面白い先生が、私の學校にもほしいねー。
兄『未だ面白い事があるよ、其處の桶を取つて來て御覧、中に水氣は少つともないだろう、それを火の上から、コウ被せて置くと、暫ばらく經つと、火が消へてしまうよ、それは人間が、一室の中に閉ち籠つて居ると、呼吸が出來なくなつて、死ぬる様に、空氣が少なくなると、蠟燭が窒息して死ぬるのだよ、火の點ぼるのは、酸素があるからだと、先き云つたろう、その酸素が空氣の中にあるのだが、空氣が少なくなるから、出來た丈けのガスが、燃へきれなくて、烟になつて桶の中に一つぱいになる、同じ道理で、粗製の蠟燭は、空氣の分量と平均を保もたないから、蒸氣が多く出來て、烟が立つのよ。
花『兄さんそんなら、烟とか、瓦斯とか云ふものは、どんな成立のものですか。
兄『賢こらしく尋ねるねー、烟はつまり、肉眼には見分られない程の、小さい炭の粒々さ。理學上では、炭素と云ふが……。
花『炭素と炭素なら知つて居りますよ、河本先生が、炭素と云ふものは、能く燃へるものだとおつしやいました、砂糖や、金剛石も、炭素ですとネー。
兄『能く知つてるネー、然し炭素は、自分で燃へる力はないよ、酸素と出合へば、初じめて燃へるけれども、……だから、松脂の烟を作つて、酸素の入いつてる瓶に、管でみちびく時は、電氣燈の様なひどい光りが出るよ。併し、火を點ぼして置くと、蠟燭はどうなるかね。
花『その位のとは、熊吉でも、亘でも、道の端の小供でも知てますとも。
兄『ではどうなるの。

花『無論消へて仕まいます。

兄『ハヽア――此馬鹿學者樣、おつと違がいますよ。烟となつて消へると云ふは、理學も化學も知らない人の眠言だ。地球の上には、消へてしまふと云ふものは、一とつもありやしない、水は乾わけば蒸發氣になり、人の躰は死ぬれば土となり、種々の分子となりて飛散し蠟燭は燃ゆれば目にこそ見へね、一種のガスとなつて、天地の間には、どこかに殘こつてるのさ。虚言と思もへば、此處へ手を出して御覽、もつと下へ、まだ〳〵燒けやしないよ、大じようぶだよ。それ暑ついだろう。目に見へなくても、手に觸れる、瓦斯になつてる證據さ、お前のいつでも、マツチや、付け木を、らんぷのほやの上に、そつと臨けると、燃へ付くだろう、火にとゞかなくても、燃へるのは、燃へべきもの丶ある證據だろう、も一とつ見易すい證據は、ランプに火を燈ぼすと、內がわに一ぱい、露が出來るだろう。捨てとくと、汗の樣になつて落ちて來るだろう。

花『知つて居ます、よそれはランプの火が、水氣を呼びよせるのでしよう。

兄『違ふよ、呼ぶのでも出すのでもないが、蠟から出て來るガスを、水素と云つて、通常の水は、九分の一の水素と、八分の酸素で出來て居るが、此水素が燃へると云ふと、空氣の中の酸素に出つかわして、そこで水が出來る。が、此水素は、非常に他の物を燃す力が强よいから、若し水素の入いつてる瓶の中へ、此の蠟燭を入れると、お前が『それ燃へますよ』と、早や口に云ひきらない內に、燃へきれてしまふよ、そして、水素は、また非常に輕るいものだから、地質の極よい絹に、油藥を塗つて、袋をこしらへ、その中へ水素を入れて、

嚴しく口を閉ぢて、握ぎつて居れば、お前の樣な、輕ひものは、空氣さへあれば、どこ迄も上へ釣し上げられてしまふよ。輕氣球と云ふものがあるだろう、あれはその理屈で出來て居るのだよ。

花『それでは內でも輕氣球は作れますか、一つ作つて見たいナ。

兄『弄物の輕氣球ならば、純粹の水素計りでなくても、炭素の混じつた、炭酸瓦斯でも出來るよ、今云つた蠟から出て來た、水素が燃へる時は、一部は水になるが、今一部は炭酸瓦斯になる、その炭酸瓦斯は、人間の口から呼吸になつて出るものと、同じ物だから、石鹼球を吹くと、高く上るのは、手近い輕氣球が出來たのさ、それ丈けでなく、水素と云ふものは、先き言つた樣に、非常に強よく燃へ易いものだから、世界が水素の火事でも起そうものなら、奈良の大佛も、鋼鐵艦も、大工の道具も、鍋釜も、煙管も、釘も鐵の屋根も、金貨も、銀貨も、見る間に燃へる、人間は、生きては居られんけれど、よく出來てるとには、空氣の中に、窒素と云ふものがあつて、蠟の燃へるのも、遲くし、又た世界火事も止どめてるのだが、まだ云へば、今夜中喋べりつゝけても、盡ないから、また後は明日にしよう。

史談

修羅場裏の天使（上）

（ナイチンゲール女史の事蹟）

英國の詩人曾て歌ふて曰く、見よや彼小さき蠟燭如何に遠き光を放つよ、邪まなる世に善行の輝やくも亦斯くの如し」と。薔薇の花咲く所牢獄すらも猶美しく、

善行の彰はる〵所血腥き場所も猶其面目を變ず。美妙の天使手に光明の燈を取て入れば、修羅の巷も亦樂園の片影を覗ふ可し。血雨、腥風、砲煙、硝霧、殘刻、死、此等の滿ち〳〵たる歴史も、如何に或男子或婦人或小兒の慈仁博愛の擧動によりて其面目を一新せられたるよ。ナイチンゲール女史の事蹟を知る者は、必らず其然るを知らむ。

風寒く水凝り天地慘として鬱陶しき冬の最中に谷の戸出る鶯の春呼び返へす愛らしき聲を聞く如く、墨より黒き風雨の夜に一點の燈光を認めたる時の如く、世を厭ひ人を疑ひ人生を蔑にし去らむと欲するの心を慰めて再び希望の道に向はしむるものは、暗き世に照る善行の光りなり。斯る光りの其處に彼處に點々見ゆる間は、吾等は猶希望を懷ひて光りの爲めに働かんことを務め、其の點々數ふ可き光りが漸くにして星の夜の光りとなり、曉の光となり、終には白日の光りとなるに到らむことを望むを得るなり。ナイチンゲール女史の如きは、十九世紀の暗黒界に輝る一の明星なり。女史が歴史卷中に黄金文字を以て印せし事業は、實に四十年前に爲されたることなれ共、歳月は其事業の光を消磨せずして却てます〳〵之を大ならしめたり。女史が活動世界を退きしより已に數十年、其風を聞き其事蹟を讀むで志を起せる者、擧て數ふ可からず。其暫時の間の事業を基礎として、諸國に起り來りたるの博愛慈仁事業は、亦擧て數ふ可らず。盖し善行は多く子孫を生み、光明は自づから增殖するの傾向を有するは、事實なれば也。惟ふにナイチンゲール女史の事蹟の如きは、歴史のあらむ限り、光明の人を生み光明の事業を生むを已めざる可し。先頃英國に於て、クリミヤ戰爭に關係せし將士、記念の會を開きし折、投票を以て同戰爭中尤も一般の注意を惹き一般の祝福を受けたる人を擧げしに、滿坐の投票は皆唯一のナイチン

ゲール女史に向つて落ちたりと。蓋し博愛の事業は不朽にして、精神界の爵位は千載不磨なり。露國皇帝の墓は田となり、セバストポールの砲臺は網干し場となり、バラクラヴァ輕騎隊の話も茫として夢の如くなる時にも、ナイチンゲール女史の名は夫れ或は今の如く殘らむ歟。

眞なる者は千年も新なり。光明の實例は幾度繰り返へさるゝも、常に生きて力あり。況んや今や戰端已に東洋二大帝國の間に開け、我幾多の同胞は我等に代つて陸に海に血戰しまた血戰せんとしつゝあるの時、四十年前東歐の戰場に淑良優美の一婦人が幾萬の鬚髯男子を以てするも猶爲す能はざる事業を爲して、其本國を初じめ世界各國の婦人の心を鼓動し男子の心を鼓動せしめ、永く萬世の恵となる可き光明の事業の基礎を据へ、汲むで竭きず磨して愈新なる深長の敎訓を與へし事蹟を讀むは、豈亦無益ならずや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

歐人の公園地とも云ふ可き伊太利の風光明媚なる一都府をフロレンスと呼ぶ。今を距る六十五年前、富裕なる英國の一紳士細君と共に遊歷の途此處に暫らく逗留中、細君月に及むで一女兒を擧げたり。フロレンスに生れたれば、其まゝフロレンスナイチンゲールと名けられける。是れなむ歷史の一光彩を添へつ可き、萬人に祝せらるゝの名なりけり。

ナイチンゲール家は敎育あり財産ある田舍紳士の家にして、従てフロレンス女史も豐かなる家庭に何の心配もなく生ひ立ち、古文辭、數學、語學等其頃の女子には珍らしき周到の敎育を受けたり。然るに女史天性慈悲の心深く、六七歳の頃より人形の介抱犬猫の療治等を遊戯とし、知己朋友の中また我家に屬する小作人僕婢の中に疾病者ある每に、女史は即ち常に往きて之を訪ひ慰め、楓の如き小さき手を以てさまぐに介抱し、

少しく長じて其家に近き鉛鑛山掘石所等の役夫等の怪俄を介抱療治するに、彼等皆涙を流して「孃樣の御介抱は醫者や看護婦の介抱よりも遙か優れり」と言ひあへり。女史の天職は已に其の幼時に定まり居たりし也。

文藝

賤しくて貴し

筑峰女史

妻木樵る賤の女も鹽やくなる海人といへば物書く道をも知らじとてたゝ一樣に卑み侍れどかゝる賤しき女にして其の夫に對する責任を盡すことのあつきは却て敎育ある貴き者の及ばぬもありわらはは先つ頃よりある濱邊の漁村にをり／＼宿りにければ朝な夕な海人の妻女が爲す業を見きく毎になれし事とはいひながら雨降る夜半嵐吹あした夏はともあれ神無月いとゞ短き冬の日のはだへを徹す寒む風にまたあけやらぬ久方の月もろ共に 漣やそれにはあらで大濤を事ともせずもろ聲高く舟を仕立てとも綱ときつ行衞は雲か白浪をこぎ出て行くその時はかならず妻もとも／＼起き出て艪やる世話の甲斐々々しさ腕もはぎもあらわにてよせ來る浪に汐たるゝ身をもいとはで櫓よかぢよと一心不亂に夫を助けつゝ雲路遙に出て行く戀しきつまのうしろ影見送りてはぬれし衣をしぼり來てつめたきふしどに淋しき夢をや結ぶなる。

きはめなき大海原をあさりするわざなればゑもの多きも少なきも沖にあまたの月日を送り陸路に夫の歸り來ぬことも折々なればその爲めに家事は勿論內外萬端何くれとなく妻女皆これを引受けて葬儀祝儀は云ふまでもなく役場の屆け公けの納めものまで男の手をば借らす

して皆妻女か一手にとり計らひ仕末を爲すこそげに殊勝の限なれその上是等の夫はかほど漁業に働けとゑもの無きをり〳〵はけふのたつきにたらすがち故少しなりとも田畑などを借りうけ皆妻女かそをたかやして漸く其の日を送るものなれば麁食を味ひ破れ衣を身にまとひ數多の子等を養育するにも手助けをおくべき力もあらざればたゞ一人りにてすゝぎ洗濯はり仕事と心をくばり身を勞し休むひまとてなきまての足らざる中を學齡ともなれる子供は小學校に通はせ年たけたる女子には留守をさせ己れは日々野山に出てわきめもふらず一心に稼ぎにかたむく夕日影子に引かさるゝは親の常家路を指して急ぎ歸り來る影を見るよりをさな子等は袖にすがりて喜ぶにつけよくこそ無事にけふの日も暮しけるこそ神々のたらざる我等を憐みて助け給ふか有難けれとはいへ幼き者ともの愛にのみ引かされて夫の勞働骨折を思ひ遣るをば忘れたりとそらうち仰ぎ

また歸り來まさぬか海上無難に在しませと神を祈るもその爲めそと物案しなるそのうちに時雨來て海人かとま屋におとつるゝ船ひく聲に驚きて妻はとく〳〵起き上り夫も歸り來ませしかと急ぎ海邊に走り出つ。

つまは荒浪をおしわけ中ばは汐にぬれつゝもエイヤ〳〵と漕よする妻女は種々〳〵に勞れをねぎらひて我家にともなひいそぎたく火のそれよりもいとあつき妻女か言の葉に凍りし手足もあたゝまり機嫌よげにゑものゝ多少なと語り合ひ慰められつ慰めつたがひに無事を祝ひては親子集ひて漁りせしゑ物を料理し睦しく夕げを終り夫と子供は打つれて勞れ休めの床にふし妻はのこりてあすの用意をなしつゝも送る日々の苦しみの內にも樂しみ多かめりこの樂しみは神々の惠によれと實は我妻の働きによるぞかし左れば賤の女とても一家の守りにていと貴ふときものぞかし其身貴く地位高く財産に富むとも其行惡しく妻たる道を勵ますは此

の賤の女にも劣りぬべし富貴高位の人々もかゝる賤の女を鑑みとして夫を助けつゝ稼きを怠らで夫や子供の爲め家の爲め國の爲め勉め給へかしと祈るになん。

家政

己れの心に一鞭を加へよ

一概には云ひ難けれども、十數年の長き間、女學校に敎育を受け、出でゝは一ッぱしの良妻君となり給まわんと期せしもの、意外にも何も知り給はず、化學、理學は知れども、日用品に適用するを知らざるが故に、平常の益に立たず。社會學には長じ給へども、隣人との交際に失敗して、おてんば、生意氣とあざけられ、赤面止む時なく、歷史は太古以來の事を暗誦し給へども、今日我國の有樣、地位を解せず。經濟學は、毎月の支出入には、何の關係も有たず、生理學は庖刀傷に對しては、一點の補ないも爲さず、かくて衣服の始末の下手なる處、張り物の出來ぬ所などを、一々數ふれば、時によれば、五十年前の姑に劣るも、勝さらざるよあり。之れ必竟、學校を完全なる敎育場と心得、之れを終ゆれば、もはや全き人となれりと心得へ給へるによるなるべし。かゝる人にかぎりて、暇あれば小說にふけりて、食事も忘するゝ事はあれども、智識のたしになるべき、書物等はうるさしとしてはね付け、不始末、不調法の事を爲して、心に恥ぢず。心を勵ますとなきにあらざれども、事すめば、潮の如く引き去りて、忘すれはつ。かゝる人に、一言の注意を呈するは大切なる業なるべし。

余はかゝる人に云わんとす、御身は先づ御身の怠惰心をざし／＼と鞭うち給へ、之れ萬事の原なり。世話しき人が、此の事業を爲す間、御身は柱に椅りて庭を眺め給ふにあらずや。其間に古きとにても、新しき事に

ても、益ある問題を撰らびて讀み給へば、多少の益なきことあらざるべし。只だその消化力は、人々によりて多少あれども、古き事は忘れ、新らしき事は入らざるに比して、幾許の差ひぞや、御身は困難の間にありて、出來得ざる程の大事業を爲せし人を指ざし、驚ろいて、彼は天才なり、奇蹟なりと云ひ給へどもその人の生れたる以來の履歴を志らべ給へば、大抵の人は、一生の幾分は、空なしく過ごし、半ばにして目を醒まし、志を立てゝ、始めて天才と呼ばるゝの事業を爲すに至るもの多し、失望はゆめ忘給ひぞ。失望のある處に、成功は同居せず、成功は光の小供なればなり。六十にして初じめて手習を始じめ、四十にしていろはを讀む事を習ひても、遂に天才、奇蹟を以て人に目せらるゝに至りし人々あるを知り給わずや。望みは何時にても起すを得べく、起したる望みは、其の時より實行するを得べく、實行する處には、己れの怠惰心の外には强よくして恐るべき敵はあらじ。故に怠惰を先づ誡しめ給へと云ふなり。凡ての名譽、成功、安慰、平和は、多くは苦勞の度によりて報ひらる。遊びて暮らすものは、乞食の不名譽を得、平生なまけし學生は、落第の成蹟あり之に引きかへて、紙屑拾ひより成り立ちて、數萬金の財産を蓄ふるものあり。勤勉と節儉の大勳章を得し鹽原多助の如きものもあり。されば、誡しむべきは怠惰なり。

彼の實用なる文學に從事せるを以て、有名なるマルチノー女史は、身躰極めて弱わく、度々熱病に犯され、遂に、聾と迄になりたれども、何事かを爲し遂げんとする志は少しも屈せず、遂に雜誌の投書を作り、應用經濟書を作り、敎育論を著はし、歷史を著はし、佛國の大學者コントの實驗哲學論の拔萃を英譯する等、實に實用的文學の目的をつらぬきたり。

其外弟妹を養育、救育する大任を有する傍らを以て、

十六年の星霜を費して、セークスピヤの引照を作りし、クラーク夫人あり。夫の死去の後、五人の子供を養育しつゝ、三千年來の婦人傳、然かも九百ページの細字大本を著はせしヘール夫人あり。マリー、ハリエット女史は、精苦力行の後、工藝と文學を兼ねたる雜誌の實例を初めて起こし、グリールソン夫人は家貧しくして、裁縫によりて生活を爲す僅の間に、近邊の牧師の家に走り行きて、質問を試ろみ、遂にヘブリユー、グリーキ、ラテン、フランスの語に通じ、自由に會話を爲し得るのみならず、グリーキ羅馬の文學、歴史、神學、哲學、數學等に於て、當時類稀れなる學者となれりと云ふ。かく時間なく身躰弱わく、助けなき婦人すら、前後、少くなき大事業を爲し遂げしを見れば、况して時間あり、便宜あり、基礎となすべき學問あり、强壯なる身躰を有する、今の人々にして、などて何事か爲し遂げ得ざるとかある、爲し得べき最良の地位にあり、爲し得べき時世に遇ひて、尚ほ爲さゞれば、何の云ひわけありて、世に立たんや、如何に富めばとて、求めて其實をえらざるや。赤面せる時、怒れる時、勵げめる時、悲しめる時、その志を再び挫くとなく、立ちたる志に、一鞭を加へ、其の時より走しり始じめば、よし古しへの名婦の通りになり得ずとも、その幾分をも習ひ得ずと云ふとあらざるべし。かへすがへすも己の心に鞭を加ふる事をゆめ怠り給へぞ。

蚊のはなし

惡くむべきは蚊の一群也、罪なき小兒を眠より起し、虚弱なる老人を坐に堪へざらしめ、試驗前なる學生をして、一夜の學びすら爲すを得ざらしむ。蚊の惡むべきは貴賤老少の差なきのみならず、我國と他の國と又た相異ならず。音とに聞こへし熱國印度の如きは、そ

の攻撃力我に勝るも劣らざれば、その防禦の仕方も、亦た我れに勝さりて注意したるものあり。

印度人が安眠を得んと欲するには、第一に最も注意を拂らはざるべからざるは清冷なり。盗賊の入來は問ふ所にあらず、家の窓も、入り口の戸も、カラリと開けて、その眞中に、堅固なる廣き寐臺を置き、その周圍には、絹糸若しくは、木綿糸にて、薄すく透明に織り上げたる、美はしき幕を下げたり。若し不幸にして、僅か一匹の蚊にだに、その城に攻入られたらん時は、樂のしき一夜安眠の暇を告ぐるのみならず、强壯なる健康にも、平和なる性質にも、同時に暇を命ぜざるべからざればなり、熱帶地方を旅行せし或る人は、平素誠に强壯にして、性質靜穩なるにかゝわらず、一匹の蚊の蚊帳の中に入りて、終夜之を見出だし得ざりしため、翌朝は大發熱を起こし、平生の忍耐の最微分子の一つも見へざる迄に、癇癪持と變ぜりと云ふ。

それ位の甚だしき攻撃力あるにより、臥床の中に入るには、非常の熟練を必要とす、先づ氣を付けて蚊帳の裾を臥床の下に挾み、自分の入らんとする一方のみを殘しをきて、その裾を引上て左の手に持ち、右の手には馬の尾にて造りたる麈の如きもの、止を得ざれば、西洋手拭を以て、胡桃の油を入れたるランプを、明かるく照らし、精神込めて敵を追ひ拂ひ、遙るか彼處に逃ぐるを見すましたる時は、自分の躰の他に、危機一髮も半髮もあけざる速かさを以て、蚊帳の中へ飛び込み、堅く關門を閉すなり。成功すれば外にありて、布の目より入らんと、無益にあせる蚊軍を、冷やかに笑ふの榮を有すれども、もしその一つだに進入せしむる時はもはや最後なり。自分と自分をかき裂き、幾度か自分の顏を打ちたゝき故なくして怒り、躰は熱し、二三十の傷は見す〳〵生じ、眠むくはなり、終夜の苦しみ例ふるに物なし。かくする内に、鳥は鳴き、東は白

み、益々不滿は增し、頭は重くなり、敵は遊が如く、慰むが如く、隙さへあれば攻擊して已まず。かくて、もはや太陽は出でゝ、己れは床より出でざるべからざるに至れば、終夜の敵は、滿足したる狀にて蚊帳の上に上ぼり、腹を脹らして安息す。此時何程怒かりて、敵を打ち殺ろすも、最早無益の殺傷のみ。

此の惡くむべき有樣は隨分日本にてもめづらしからざることなるが小さき蚊の蚊帳の目より衝き入るものは、天氣の日に蚊帳を出だし麩のりを解かして、その汁を振掛けじと〱になして竿に乾し、乾かしむる時は、立ちたる毛は蚊帳の目と目との間に倒れて、一本の布目を加はへて、小さき蚊の進入を妨くべし、若し過つて彼等に一噛されし時は怒りにはやつて、自分を掻裂くことを爲さず、藥種屋よりヨジユムチンキと云ふ藥を購ない、淸き筆に濕たして、噛まれし處に塗り付くべし、忽ち痛みは去り腫は萎むべし。

料理法

炎天にて魚の不漁なるを憂ふるなかれ、市に蔬菜、卵子、雞肉あれば、料理するに足るべし。生き〱としたる靑物なけれども、南瓜、白瓜、胡蘿蔔、茄子、葱等は今や盛りを極めたり。他人の家には何を食して暮らすらん、內のものは何故に味よき料理を得ざるにやと、縮むる額の皺を延ばして、少しく料理の法を調べ給へ、手輕くして美味なる料理は、幾何にても得難からざるなり。

白瓜の卵燒

能く熟したる白瓜の皮を剝き、二つに割り、中の種子をさじにて掬ひ去り、一寸四角位に切り、見籠に並らべて、上よりばらりと鹽を挪り、暫時をきて水氣を去りたる後、雞卵の解きたる中に濕たし、引き上げてパ

ゞの粉の上を轉ろばし、油をしきたる鍋にて燒くべし。

玉　葱

玉葱は能く保存し得るが故に、此の頃の如く魚肉青物に乏しき時の料理には、最も間に合ひて好るべし。

第一、西洋料理のすきなる人の用ゆる一法は、ねぎの上皮の赤かき物を去り、二三分位に輪切にし、一時間計り鹽水に濕たしおき、引き上けて、牛乳にて煮上げ、温かき上よりバタを掛けて食すべし。

第二、牛の脂を解かし、湯出たる玉葱を入れて炙り、之れに一二合の水と鹽、胡椒、麥粉、極少量の砂糖を入れ、二十分の間度々搔き廻はし、どろ〳〵になりたる時、炙りたる麵包の上に掛けて食すべし。

第三、玉葱の皮を去り、薄すく切りて湯出ては絞り、湯出では絞ぼり、二三度も水を變へ、臭氣の拔けたる時、湯出拔卵の黄味計りを、少さく刻ざみて、鹽を加へたるものゝ中に入れ、玉葱と、黄味とを能く混和し、味淋酢、若しくは、砂糖、酢を掛けて食すべし。

玉葱は、能く湯出こぼす時は、悪臭全く去り、老人小供の歯なきものにても、噛むに難たからざれば、之れを丸る湯出になせしものを、砂糖醬油にて堅魚出しにて煮付け、もしくは牛肉の中に入れて、煮る時は、淡泊にして一種の風味あり。

雞肉の調和煮

柔らかき雞肉を、小さく斬り、別つに大根、胡蘿蔔、葱、生揚、銀杏、じやがいも、さつまいも等種々なるものを骰の目に斬り、味淋醬油にて長く煮、柔らかくなりたる處、先きの雞肉を入れ、一と沸へ立ち沸へたる處へ、葛をとかしたるものを入れて、どろ〳〵にして食用とす。

かすてら卵子

じやが芋をおろして、之れに卵子と、砂糖、鹽、うど

ん粉を入れてかき廻し、油を志きたる卵燒きに入れて蓋をなし、蓋の上よりも少しばかりの火を置き、上下より蒸し燒くべし、卵は鍋の燒けたる頃入るゝを可しとす。

卵花卵

鰹節の出しに味淋醬油を合はせたるもの五勺に、雞卵二個を入れて、能くかき廻し、花形の器、若しくは茶飲茶碗に入れて、平たき鍋の中に、沸騰せる湯の中に入れ、湯の入らざる樣に注意しつゝ、湯出上げて用ゆべし。

赤兒と冷水浴

大人、小供が冷水浴を爲すことは最も健康に效驗あるは大抵人の知る處なれど、赤兒に冷水浴を爲さしむる事は西洋にても問題となり居り、多くは冒寒の恐ありとて世の母親は之を避くるものあり、然れども赤兒に冷水浴を施行して大に其利益したるものも尠からず、大膽なる醫者は決して赤兒に冷水浴を施すを止めず、方法其宜しきに從へば赤兒の健康を助くる事少々ならず、今經驗したる所の一例を擧げん。

或家の赤兒を有せる母親は、赤兒に冷水浴の利益を聞き、且つ人の勸告によりて赤兒に之を施行せんと思へども必らず赤兒は風邪に罹らん事を恐れ、甚だ躊躇したれども、先づ一たび試みて效果を見るにあらざれば全然之を廢せんと心を決したりき。

先づ寒温計七十度位(華氏)の一室に於て、湯桶二個を準備し、一個は湯を入れ置き、一個は冷水を汲み置き、別に大形の浴湯皿に冷水を準備し、石鹼、海綿、フランネル等を用意し、扨赤兒に先づ湯を遣はして石鹼もて奇麗に赤兒の身體を洗ひ、次に海綿を水に浸しそれを以て赤兒の首の邊より絞り懸くれば、水はタラ〳〵

と赤兒の身體に滴り落つ、此時疑なく赤兒は叫聲を發したれども、これ血液の循環が催動する始めなりき。

最も手早く小兒の腕、脚、顔等に冷水を流して風邪に罹ることを防ぎ、赤兒の全身に冷水浴を施行し終るまで長くとも二分時間を超過せず、水浴を終り直ちに赤兒を湯桶より出し、清淨にして乾燥せる木綿切に包み乾きたる「フランチル」の切又は「タウエル」(西洋手拭)にて赤兒の身體に濕氣なき迄に摩擦せり。

斯くの如くしたれば赤兒は身體に温暖を生じ、皮膚全く清淨となり、氣孔開發し、血液の循環を適宜にし、身體諸機關に活氣を添えたり、更に其結果に注意したりしに、赤兒は其日一日温暖にして兩頰には薔薇色を顯はし、頗る健全なるが如し。

此母親が其赤兒に冷水浴を施行せしは十一月なりしが其の冬季間は曾て胃寒に罹さりしのみならず、素より赤兒の罹り易き咽喉病にも罹らず、其家の近傍にては最も健全丈夫の小兒と評判せらるゝに至れり。

但し冷水浴を赤兒に與ふるは大に注意すべき事あり、迅速に行ふにあらざれば赤兒をして疾病を得せしむるの恐あるは言を俟たず、迅速に施行せんとならば充分の準備あるを要す、準備とは室内の正しき温度、ブランケット、海綿、西洋手拭及び湯桶の下に敷く油紙を落なく備え置き、手早く施行するの便利にすべし、又水は成るべく冷なるを宜しとす、何んとなれば水は充分冷にして之を注き懸くれば急に身體の血温を奪ひ去り、血液は其跡を補充せんとするが爲に、自然に血液の循行を催進するものにあらざれば却つて小兒に傷害を與ふることあり、されば水浴は冷水に限り、生ぬるき水は決して健康上に効驗あるものにあらず、又た一個の肝要なることは強く浴後の身體を摩擦する事なり、これは是非とも行ふべき事なり。

右に述べたる冷水浴を施行したる母親は其後二年間水浴を續けしが、赤兒は今や三齢を過し非常に活潑壯健の身體を有するに至りぬ。

惡しき書物

書物は充分其善惡を撰擇して讀まざるべからず、殊に少年小女等には善良の書を授くるにあらざれば不思議に惡感化を蒙ること多し、或家にて少年が一冊の書物（小説）を讀み居たりしに、突然其父の入り來りしに驚き甚だ狼狽して書物を後に隱くし、父の其塲を過ぎ去るを待ちたり、吁何等の怪事ぞ、吾人は天下の少年小女に向ひ一片の非言を呈せざるべからず、決して人に耻づべきの書物を讀む勿れ、汝が讀む書物は充分自由に明白に開き讀めよ、若し自由に明白に讀み能はざるものならば、全然讀む事を廢せよ。惡き書物は恐るべき毒物なるを知らずや、吾人は寧ろ此の毒物を與ふる父兄に其罪を歸せずんばあらず、精神を殺すは肉體を殺すよりも最惡なる道理を知らずや。

吾人は兒童の父兄が充分書物の善惡を撰擇する責任あるを信ずるなり。

婦人職業案內

產婆業

產婆業につき我社に問合せ玉ふ人々尠からず左に其大略を記すとなしぬ。

修業手續——產婆を養成するの處、帝國大學に第一醫院あり、麹町に楠田あり、有樂町に水原あり、廐橋に石井あり、濱町に櫻井あり、其他開業の產婆自宅に於て教授する所少とせず、第一醫院は卒業期限一ヶ年、

卒業後は内務省の試驗を要せずして開業するとを得、入學するにも格別の學力を要せず、小學高等科を卒業したる位ひにて可なれども流石は他の摸範ともなるべき産婆を養成するの目的なるだけ其人の品行、履歴に就いての取調は隨分精細なるものにして、他は卒業年限大概六ヶ月、左れど六ヶ月の勉强にて内務省の試驗に首尾能く合格するものは甚だ稀れに、普通の人は先づ二ヶ年内外の時間は修業の爲めに費やさゞるべからざるとを覺悟せざるべからず、又處によりては唯學理のみに馳せて實驗の力に乏しく、或は實驗の力は十分なるも學理に疎き所もあるとなれば入學の初め是等の點に付きては充分に吟味すると肝要なり。

修業費用――月謝として在學中帝國大學に於ては五十錢、他に於ては七十五錢内外(外に東修一圓乃至二圓)を要するのみ、其他には唯自宅なきものは下宿料及び些少の小使錢のみにて事足るとなれば自宅なき人にして先づ一ヶ月七圓もあらば十分ならん。

所得――是迄の産婆と謂へば、醫學に關する智識なきは勿論普通文字の力さへも格別有せず、唯經驗のみを以て業をなすものなれば今日及今後の婦人は一身を是迄の産婆に依頼して安心する能はざるべく、左すれば免許産婆の需用向後愈增加するは自然の勢にして、且つは免許産婆の數今日に於ては未だ格別多からざるとなれば、其所得は亦た格別なるべけれども、開業即下未だ世間に知られざる間は暫時の處休業同様と思はざるべからず。亦た産婆にして大いに注意すべき弊害は、産婆は稍もすれば生意氣にも己れの新智識を鼻に掛け、醫師の指圖を仰ぐべき所をも己れの獨斷にて爲すが如きとなり。之れが爲めに後日に禍患を遺すが如きと往々少しとせず、此等は最も忌むべく、亦た將來新産婆の信用上にも關するとにして、學校によりては在學中往々此風習に感染する所なきにあらざれば、各學

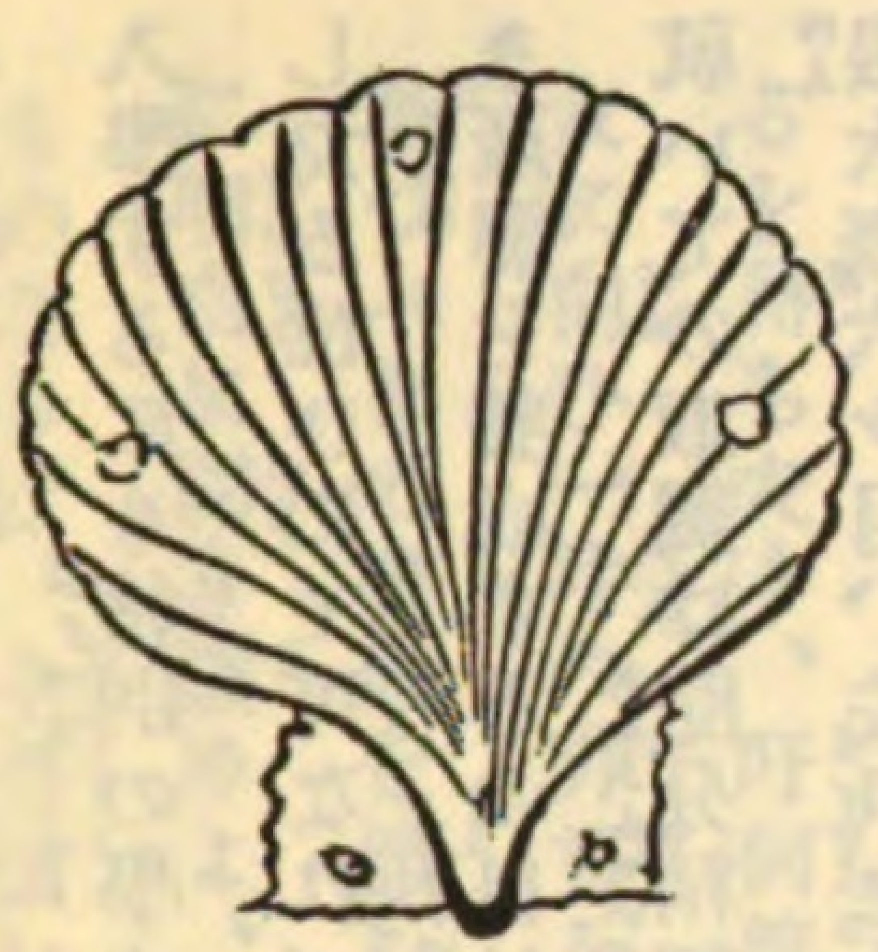
校に於いては此點に關する注意は甚だ肝要なるべく、帝國大學に於ては此點に注意する所殊に厚しと云ふ。

手藝案內

帆立貝及其細工（續）

帆立貝の事に就ては大畧前々號の紙上に記述したり、これより聊か其細工に就きて陳述すべし。

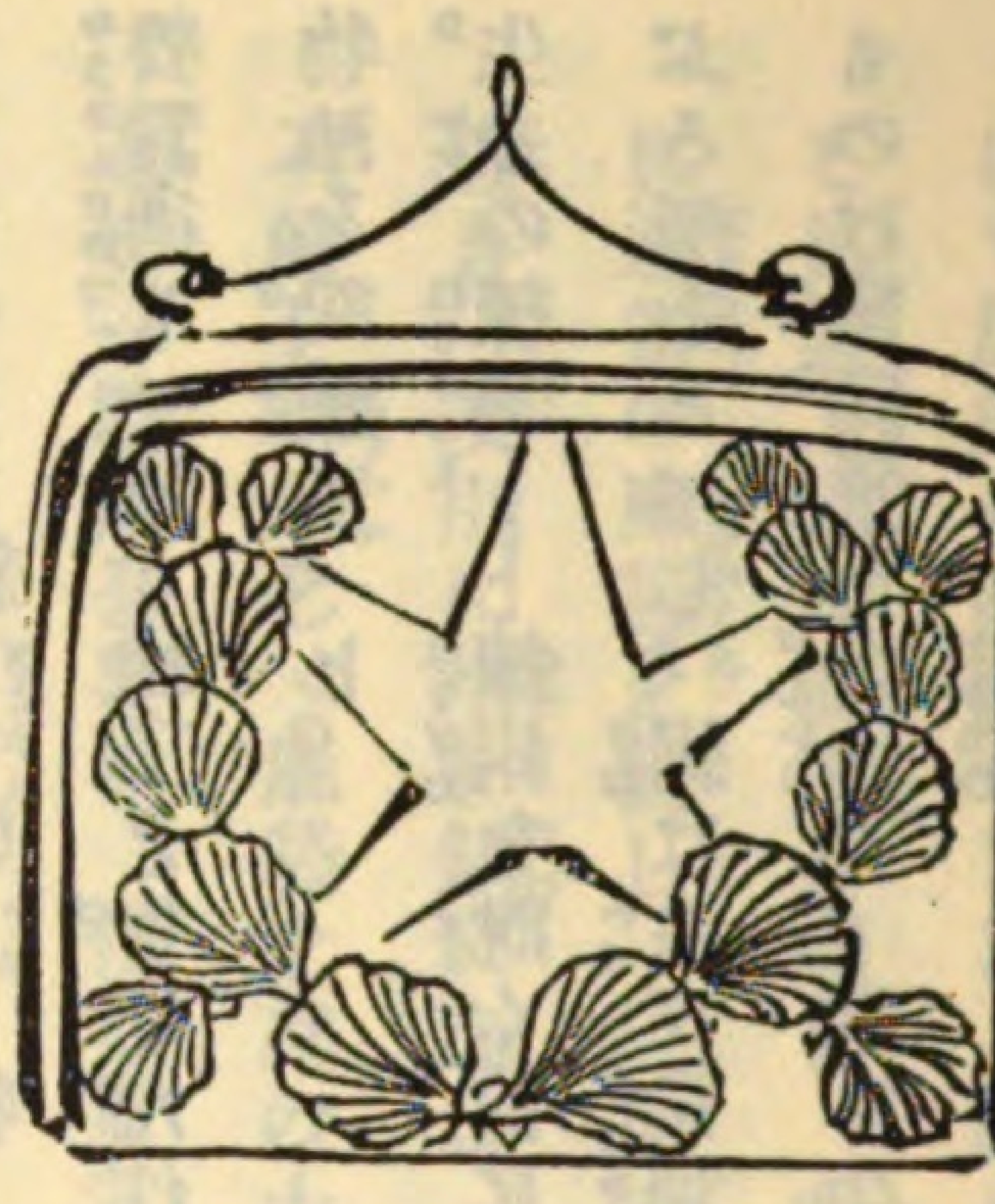
帆立貝は我國にては大抵鍋の代用を爲す、譬へば玉子燒若しくは蛤鍋、寄鍋等に最も妙なるは第一帆立貝は美麗にして鐵鍋等の如き鐵氣の吹くことなければなり、鍋の代用とするには其殼のまゝ使用し別に手數を要せずと雖も、西洋にては大抵帆立貝を家庭裝飾品の重なるものに使用す、之を使用するには第一圖の如く殼の邊端に穴を穿たざるべからず、此穴によりて紐などを貫き飾裝品と爲す事を得るなり、併し此穴を穿つに於て注意すべき事あり、其は外部より錐などにて穿つ時は往々破折して用を爲さゞる事ある故、內部より（卽ち凹き方より）何か物に押當て破折せざるやうに注意し靜に揉み通すべし、錐は鼠齒と稱する三目錐最も可なるべし。



第一圖

玆に帆立貝の細工物一つ二つ掲ぐべし。第二圖に示せるものは新聞挿にして、海邊に在る家庭の書齋等に飾るは最も妙なり、之を製するには、重味ある長一尺六寸幅一尺三寸もある二枚の厚紙を取り、其一枚に「ブラシユ」又は天鵞絨を以て蔽ひ、圖に示すが如く其中心より少しく頂上に向ひて馬蹄蟹か海燕（圖に示せるは海燕なり、日本にて「たこのまくら」と呼ぶ大概各地の海岸に發見せらる）を置く、此中心を環りて

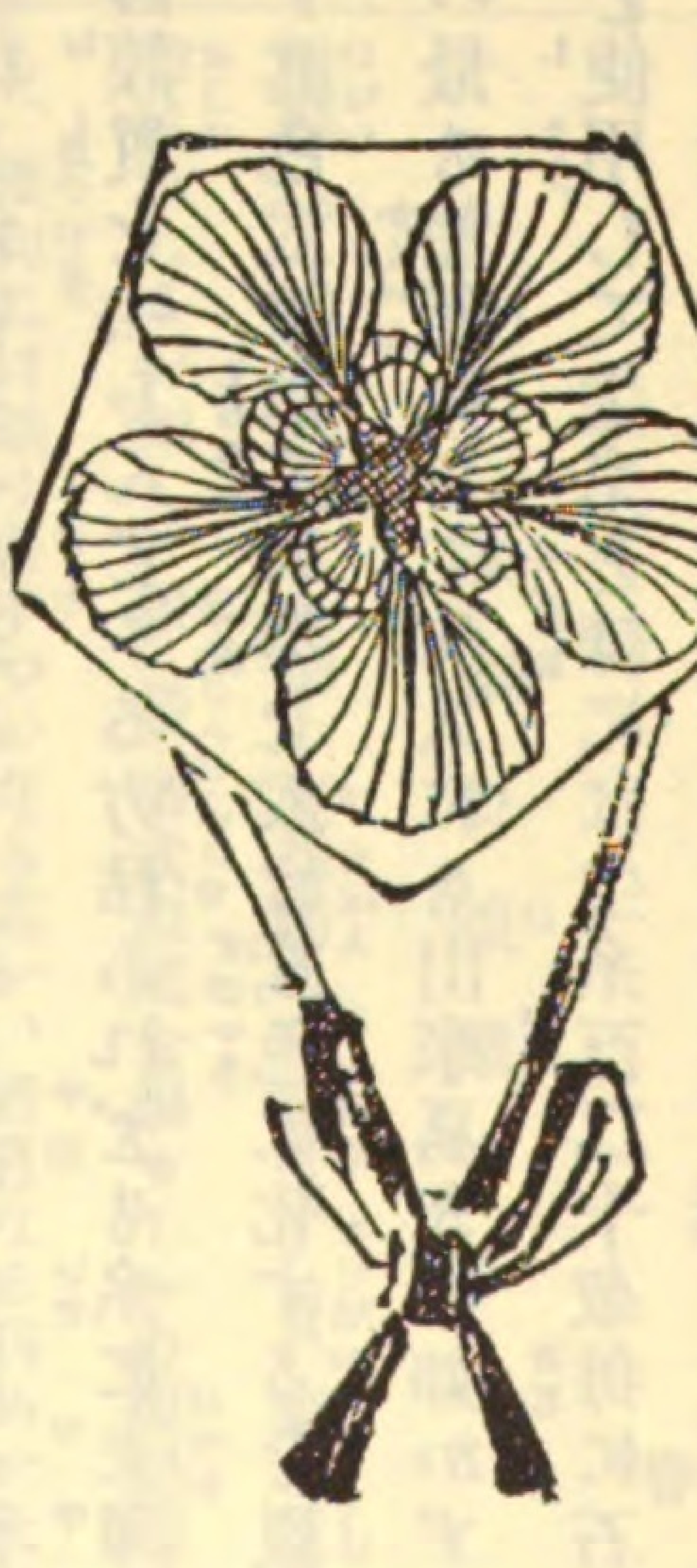
圖の如く帆立貝を並らぶ、但し下の方は稍々大なるものを撰み、次第〱に小なるものを積上ぐるを美麗とす、其四隅には同形のものか、又は少さきものを幾個



第二圖

となく並ぶべし、斯の如く一々穿たれたる穴によりて絹又は繻子又たは「リチン」を以て帆立貝に縫ひつくれば決して墜落する憂なし、而して二枚の厚紙の下底は丈夫なる紐にて結びつけ上部は美麗なる紐を以て閉ぢ（此紐にて新聞紙を閉込むやうにする）其上端の兩端には金具を附して小さき鐵鎖又は紐をつけ、壁等に懸くる便にす。

第三圖は針挿なり、これは最も容易に製し得らる則ち第三圖に示す通り、徑四寸もある五角形の厚紙の上を美麗なる絹布帛又は天鵞絨にて蔽ひ、大小五個宛を花形に置き、厚紙に縫ひ止め其中央に綿を入れたる針挿を置き（眞綿を紅絹にて包みたるものにて宜し、西洋にては「赤兒用リボン」の團塊を用ゆ）之に二條の紐をつけ壁などに掛くるやうにすれば美事なる針指を得るなり、帆立貝にては種々なる裝飾品を製し得れども日本の家庭にさして入用のものにもあらざれば略しぬ、



第三圖

海濱に避暑せる諸卿は帆立貝を土產に持ち歸りて何か工夫を凝らして何か珍奇なる製作品を出して見玉へかし。

下駄疊の汚穢を除く法

夏季には駒下駄又は男子の表附下駄の疊の汚れ易きものゆゑ、夏季は疊のつかざる書生下駄の如きを最も宜しとす、若し下駄の疊等に汚穢あらば簡易なる除却法あり、其は豆腐の滓を下駄の疊に置き布帛にてこすり落せば忽ち奇麗に拭き取らるゝなり。

新染物法

養蠶術も一通り結了を告げたれば、これより西洋の染物法を記載すべし。

生糸の練晒――練絹を説く前に少しく生糸に就きて述ぶる所あるべし、絹は糸又帛地孰れにても其の生なるものは護謨質を含有す、則ち生糸は繭の頭部に近接せる二個の孔中の液中より生じて天然の質に護謨を含有するを以て、若し此の護謨質を去らざる時は、到底糸の功用を爲し能はず、換言すれば此護謨質を去るにあらざれば練絹を製する能はざるなり、之を爲すには石鹸と「アルカリー」は最も要用なるものなり、併しながら「アルカリー」を以て此法を爲すには最も心を用ゆべきことあり、其は「アルカリー」は劇藥なるを以て糸の纎緯を傷害するの恐あり、故に單に熱湯を注ぎて其の護謨質を去らんとする方法あれども糸に光澤を顯はさず其色或は白茶に變じ或は鳶色に化するを以て石鹸練の最も簡便にして何人にも出來易きに如かず、扨石鹸を使用して生糸を練には生糸百二十匁毎に石鹸三十匁の比例を以て水(但し水の分量は鍋に石鹸を溶して糸を浸すに餘量あるを要す)にこまかに刻みて釜中に投じ、煮沸する事二三時間にして丁寧に攪きまぜ、石鹸の全く溶解するを待ちて繰糸の眞中に捧(金屬にても木にても宜し、汚穢のつかざるものを)を通し、其棒を鍋の上に渡しかけ、繰糸の下部を鍋中に垂らし、漸次に上部を下部に轉廻し或は横邊を上部に廻し、下なる熱湯の煮沸する中に於て浸染し置く時は、生糸に含

有せる護謨質は自然に融解して其容積を減じ絲質に光澤を顯はすに至るなり、此に至れば鍋中の湯大に減少するを以て、生糸を取り出し、棒の兩端を高く釣り上げて温氣を冷却せしめ、能き程に之を開列し、一繰ごとに其下端に麻糸を通し、此兩端を結び合せ置き、別に適當の麻袋を製し、以前の生糸を容れて其口を括り置き、又別に水を鍋に充し、前に使用したる半分程の石鹼を溶解し、麻袋を其の中に投入して之を煎養すること一時間を要す、但し煎煮中は棒を以て鍋中を攪きまぜ、麻袋の湯面に浮み又は鍋底に沈溺することなからしめ、然る後に徐々麻袋を取出し、温氣を冷却し、糸を袋より出し、棒に打懸けて石鹼の氣を除くべし、其法は桶三個に各温湯を滿たし糸を洗ふに始は甲の桶にて洗ひ、大略石鹼の氣を去り、次にこの桶にて洗ひ又其次に丙の桶にて洗ひ、斯の如く漸々石鹼の氣を去り盡くし、今度は銅器に硫酸を熱湯二百倍の分量にて混和し、竹の箸を以て能く攪亂し、此液汁に糸を浸入し置くこと五分時間にして取出し、清水にて能く洗濯して能く乾燥せしむべし、これ染色の下地と知るべし、練絹法の別法は本紙第二十八號を參照ありたし。

社交一斑

流行の栞

春夢

安價の根懸

根懸にも種々あれど今年の夏季間の流行は丁貝製の管根懸が最も多く行はれたるが如し、銀婚御式以來金銀モールの根懸隨分流行したれども、夏向には餘り派手やかなる爲か、野暮なる爲めか大なる勢力と爲ること能はざりき、目下安物にて流行するは圖に示せるが如き、『白菊懸と稱するものなり、これは白菊を五つ並べて根懸としたるものにして十五六歳迄の處女不斷の使用には差して品格の惡るき品にあらず、此品に就きて賞すべき所は、其の菊の花は紙又は布帛類にて製せず、蒲英公の

整を以て精巧に製造したる所亦可憐掬するに堪ゆべし、近來は花簪の如きものは次第々々に自然に近づき製造も巧緻を極め大に美術の本旨に造詣するは喜ぶべき事ならずや、此白菊懸も蒲英公を使用する丈が未だ自然に近からざれども、眞なる菊花を以て菊花を製せば又々趣味の大且つ美なるに



至るべし、但し白菊懸の價は僅に二錢以下にありと。

今一つ流行は摸擬眞珠の根懸なり、是れは臺は金メッキにして小粒の摸擬眞珠五個を挿みて修飾と爲す、但し摸擬眞珠は西洋菓子の飾玉と爲すものにして、一見眞珠と違からず、一寸ごまかしの利く品なり、之を小袖に丸帶の人が挿したらば誰にても二十圓以下のものとは受取らず、然れども直段を聞けば、二十錢內外なれば、使用者によりては二百倍の高く見らるゝとなり、但し此眞珠の色は其儘にて變色の恐なしと雖も、金メッキの色褪せるは保證の限にあらず。

懷中香水箱

近來紳士貴女の懷中に香水箱を藏むるもの弗々見受けらる、何故にかと問ふが野暮なり、化粧の事に心懸けよき紳士貴女は、宅にて香水澤山振りかけて外出をしても途中にて香水の匂ひ消散する故、車上又は他家の化粧室にて懷中より取出しフン〳〵と香水を振り撒く夜會等に用ある品なり、圖に示せるは日本にて製造し、目下專賣特許出願中の由にて、眞鍮又は洋白を以て外面を圍み、邊幅に網代を、中央に菖蒲を顯はしたるもの最も多く見受らる、圖は上部の蓋を開きたる者にして、一方の口より香水を注入し、其一端を指にて押せば、左端の



曲「パイプ」狀の管より香水霧と化して噴出す、顚倒しても決して香水の流出する恐なしといふ。

流行の花

蓮、蕣花は全盛を過ぎこれからの花は勿論秋の七草なり、七草も早やそろ〳〵咲き初めて雅人の來るを待つに似たり、關白前左大臣の歌に「我宿に秋の野邊をばうつせりと花見に行かん人につげばや」いざや七草の栞せん、東京にて名所は本所萩寺、向島百花園、廣尾、笑花園なり、而して都下萩の第一名所は萩寺の萩なるは誰人も知れども名のみ聞きて未だ其處を知らざる人に少しく其の道案内を記さん、先づ順路より行

かば兩國橋を渡り左に河岸を添ひ（勿論上野淺草方面の人は廐橋を渡りて宜し、本所深川の人は勿論大川を渡るに及ばず）横網町郵便局の向横町を龜澤町二丁目に曲り法恩寺橋通り天神橋を越ゑ巡查派出所を左方へ龜井戸天神四門前を凡そ二丁程を進み赤川龍眼寺と尋ね玉はゞ所に有名なり、門內悉く萩を植ゑあり正面の本堂正觀世音の扁額は山岡鐵舟氏の健筆飛龍の觀あり、それより右へ庫裏の庭廻りは萩又萩にして本年は殆ど往來を妨ぐる程に繁茂し、先頃の暴風雨にも差して損傷あらざりき、これより進みて梁戸內には紅白の別種の萩種あり（梁內には眞盛の時分ならでは入覽を許さず）其內部には瓢形の池ありて紅白の蓮今は花瓣落ち去りて小澤露天に冲し中將姬の織機を待てども尚ほ萬綠の蓮葉中三五の紅點なきにし非ず、此處より一目數百株の叢中を迂廻し前栽に出ずれば府下三木の一なる有名の木槲あり見て歸るも面白し、萩寺のみにて興盡きずさならば同寺を出で川添ひに北へ又兵衛橋を渡り柳島妙見でも參詣し同所橋本にて川魚料理を賞玩してもよろしく、此處より向島秋葉社に出で有馬の溫泉に入浴するも隨意なり土堤に出で白髯社前を素通し（信者は立ち寄りてもお勝手）百花園の七草を訪ふべし、同園は先日の紙上にも報じ置きたるが如く七草各妍を鬪はし粹を極め女郎花の嬌々として色の黄なるも薄の人を招くも亦見るに堪ゆ、追而萩寺の萩は今少しく早目にして來月初旬より好き眺なれども今より露を含める蕾の色を賞するも面白かるべし。

流行の圖書

新聞社の門前に次ぎて賑なるは府下繪双紙屋の前なり幷は外にあらず彼地の戰報來る每に機敏なる江戸繪又は石版畵の版元は「日清戰爭電報」第一第二と順を追ひ或は京城の小戰爭或は豐島の海戰或は成歡の陸戰と其光景を描き或は石版畵にては日本海軍兵が運送船を一擊の下に打沈め或は操江甲板上の戰鬪或は吉野艦が濟遠を追擊或は日本陸兵勇を振ひて淸兵を殺戮する勇壯活潑の圖實に一見殺氣毛髮を立たしめ日本人民を鼓舞奮勵するもの少からず、流石に流行する役者似顏東京名所繪の如きは片隅に引込みて顏色なき有樣にて國家の事に心を注ぐ家々又は土產物に購求夥しき由又目下流行賣行ある圖書類は「支那朝鮮語學獨案內」「朝鮮八道地誌」「支那版圖」「擊劍柔術獨案內」「砲術速成書」等支那朝鮮又は戰爭戰術に係はるものなりと盜を捕ゑて繩を綯うさ言はゞ言へ流行も面白きものなり

七寶燒

七寶燒の我國に流行するはガラスの流行と其年代を等しく遠く大寶の古にありしが一時中絶して足利時代に明より渡來し義政大に數寄を極めしが其流行は重に花瓶、置物等にして茶器の如き華美を厭ふものには七寶燒を用ゆること尠かりしも夫の有名なる茶道の祖小堀遠州は大に之れを嗜み茶具は申すに及ばす、日用什具に至るまで七寶燒を適用し一時流行を極めたれども其後は別段目立ちたる流行もあらざりき。

降りて明治の今日に至り、殊に近年に至り殊更に昨年亞米利加世界博覽會後に至りては七寶燒は日本美術裝飾品中の重なるものに數へられ、大に內外人の尊敬を受くるに至りぬ、而して今日の七寶燒は其製造古代のものに比して遙に緻密意匠甚だ斬新にして其精巧なる品に至りては殆ど人工なるかを疑はしむるに至り、其製作品の區域も大に擴張せられたり、古昔にありては七寶燒は飾玉の如き或は花瓶の如き或は置物の如き或は一部の茶器等に用ゆるに過ぎざりしが如しと雖ども、今日にありては家內裝飾品には大抵七寶燒の勢力を及ぼしたり但だ日用什器に及ばざるは餘りに美術品にして其の價廉ならず到底臺所の用具とするに困難なればなり、然しながら此流行の勢力を摸擬して『石目燒』の如きものを出して七寶燒に髣髴たらしむるを見ても七寶燒流行の勢力を知るに足るなり。

七寶燒の製作品は如何なるものかと問へば、以上に述べたる飾玉、花瓶、置物、茶器等は勿論煖爐上の裝飾品、額面、火鉢、火箸の柄、蝙蝠傘の柄、印籠「ナイフ」の柄「パイプ」、寫眞入、指環、腕ボタン、簪玉、根掛玉、日本煙管、帶留金具等に至るまで大概七寶燒の勢力を蒙れり殊に額面の如きに至りて瞥見すると熟覽するも七寶燒と思ふものなく、精巧なる綺畫は書文の上に「ガラス」を蔽ひたるが如し、又製作の意匠色彩共に自由自在なれば指環、帶留の如きものに多く用ゐらるゝを見れども簪玉、根掛玉には多く見受ざるは他に故あり。

兎に角七寶燒が近來に來り美術品の錚々たる地位を占むるに至りしは其製作の非常に進歩したるが爲にして(勿論古代のものも美術品として非常に尊重するもそれは古い處を賞するなり)古の七寶燒(支那より渡來したる者は)鑄物の上に此燒をかけあるが故に勢ひ模樣色彩共に粗雜ならざるべからず、然るに近來の製作は銅七寶最も盛にして銅板を鐫りて其中に鋼鐵を植ゐ自由自在に下畫の通りに模樣を顯はし、其上より七寶燒をかくるなり、本磨きまで少からぬ手數を要すと雖も、其の全成したるものは少しも其模樣の鋼鐵仕懸なるを顯はさず優に一頭美術界に擢んづるを見るべし殊に「日ガラス」と稱し佛國にては黃金地にあらざれば製し能はすと爲し重寶の一として尊敬せらるゝものも我國にては銅七

寶にて製し得らるゝに至りければ外人は先を爭ひて日本の美術品として七寶燒を購求するに至りぬ。

七寶燒流行の勢力實に以上の如し、而して目下如何なる物品、如何なる模樣如何なる色彩なるものが流行するか、試に其重なるものを記すべし。

流行品は指環、腕ボタン、帶留の如き外飾品に多くして日用品に近きものには流行するといふ程もなけれども併し指環の如き腕ボタン（即ちカフスに附く）の如きは西洋人は申す迄もなく美術心ある紳士婦女の間に行はる、右の品々は直段の一圓を登らず（勿論好みにより一圓以上もあれども）して購ひ得らるゝ便利あればなり、若し花瓶の如きものに至りては一寸したる物品にても十圓以上に上るを以て上等社會ならでは使用し能はず、且つ指環の小品に至りては其品の細小なる程模樣も細小にして殆ど米粒一個に十六羅漢を描きたる所あり、これぞ七寶燒の妙所にして人氣の赴く所亦た此處にあり、其模樣は精密を尊ぶが故に淡泊なるものよりも緻密なるものを尊ぶ、即ち唐草の如き小紋模樣の如き一分一厘の隙間なきを宜しとす、而して西洋人向には成るべく日本的模樣譬へば古代模樣若しくは源氏兜若しくば都鳥、櫻花の如きもの最も嗜好に適す、「カフス」の「ボタン」の如き昨今の流行は圖に示すが如き揚羽蝶の一は正面一は側面を見せたる精巧の七寶燒若しくは金銀寶玉を鏤めたる精密模樣のものなり、帶留は日本婦人に限る流行品なれば、其模樣、形容は櫻花に源氏兜或ひは古代菊模樣に金屬を以て修飾したるものなり、指環はこまかき唐草に眞珠か金末を鏤り込みたるもの稍々勢力あるが如し、簪珠、根掛玉に此流行薄きは七寶燒製造品は地方に隱れて東京の流行と嗜好に不案内なる罪に座すならん、若し東京に居りて東京人の氣風と嗜好を知り面白き物品を出さば、益々流行の域に達するなるべし。

西洋人の七寶燒を尊重するは日本の七寶燒が優に美術世界に頭角を擢んじ、蒔繪、塗物の上にあるを以てなり、殊に花鳥風月を描きたる七寶燒の額面を珍重し、暖爐の上に安置して非常に珍重するを以て、逸早き營業家は西洋的趣味ある七寶燒譬へば「ランプ」の臺又は西洋食器等を製造したれども更に實行なく大なる損耗を來したりと西洋人は奇妙なる事を好み、日本の花瓶を取りて「ランプ」の臺となす如き、自分の好々の物に適用す、西洋的「パイプ」に七寶燒を施しあるものは行はれざれども、雁首附の日本煙管が西洋人の間に流行するを見ても其一端を知るべし。

目下東京にては七寶燒を賣捌く商店は二あり、一は日本橋中通り並川商

店一は銀座三丁目安藤商店なり、並川にては三十圓以上の大物（花瓶等）のみを賣捌けども、安藤にては二十錢以上の襟ボタンより賣捌き、種々の裝飾品を製造すと雖も、今少しく日本的裝具の如何を觀察し、東京人の人氣と嗜好に投ぜば流行の勢力を增進する事疑なかるべし。

日用品物價

◎白米（一圓に付）　一等白米七升二合●二等白米七升五合●三等白米七升八合●四等白米八升四合●五等白米八升七合

◎雜穀（一圓に付）　●木質大麥二斗九升●脇場大麥三升○●新肥後上小麥一斗八升五合●同麥安二斗一升●新船橋小麥一斗八升八合●新常州小麥一斗九升五合●新下總小麥一斗九升五合●新千葉小麥一斗九升三合●札入竹林麥一斗五升○並一斗六升五合●上割麥一斗五升●並一斗七升○

●佐野搗粟一斗四升五合

◎鹽（一圓に付）　●赤穗四俵（●大鹽非に八家四俵○五厘●本齋六俵二分●新齋六俵七分

◎種油（一圓に付）　●荏油十六圓十錢●地水八圓九十錢●胡麻十二圓也●桐七圓八十五錢●一川九圓四十五錢●イ九圓四十錢●久ト九圓四十三錢●星印九圓五十三錢●非桁九圓四十五錢●入山九圓六十錢●いせ箱詰九圓也●チヤスタ一圓七十九錢八十錢●タンク一圓七十一錢●ホーキ一圓七十八錢

◎昨今の東京諸物價　白米小賣標準相場は大相場の下落したる割合に下落せず小賣屋にては矢張高直の時と同樣に賣り引上ぐる時の割合で引合ざるは每度貧民困らせなり、雜穀も頃日の暴風雨の爲めに幾分か上進したれど小賣直段は變らず、魚類は益々拂底にて目下三四寸の鰺が五六錢とは安からぬ直段なり、八百屋も之に準して孰れも四五割の騰貴、石油、炭は餘り變らず炭は目下炎暑需用薄き爲め捌方尠けれども直段は下落なし、鳥類は當時市中飲食店非常の不景氣なる爲め賣行丸て片なしといふ有樣ゆゑ軍鷄、相鴨、小鳥共に大安食鳥家は大弱び、牛乳、鷄卵の如きは目下戰爭用ビスケット製造に多用する爲めビスケットと共に上直段鷄卵は是迄一個一錢五厘の者が二錢以上に騰貴したり、洋酒は不味、鰹節は一時日清事件の爲め上進せしも東北海に大漁ありしにつき直段變らず概して昨今市中の諸物價は戰爭用の數品を除き一昧の不景氣に連れて直段下落の有樣なり。

◎作今の臺所　魚類の不漁には何處の家の臺所も困却し每日々々茄子や冬瓜、冬瓜の如きものにて攻附けられ一つも肉になるもの見當らず鰺はあれども小粒にして食足らず刺身にするきはだ鮪は水浸にて昨今の時節には如何しく「そうだ」は未だ出て來ず松魚は眞盛りなれど生魚は素人の家には無沙汰にして偶々生利を買ひて氣味惡しきを發見し近所の肴屋には鹽物ばかり細君の心勞察すべし斯樣な時節には强て魚類を求るが野暮なり、冬瓜の葛煮、白瓜の鹽揉共に妙にして茄子を鴫燒に

しても酢合揉にしても胡麻合にしても其他種々の料理法にも従ふ惣菜に差支ゆることなかるべし、不漁の時の鹽物は心を用ゆべし、今時の生利には往々小蟲の生ぜるものあり之も用心すべし「卯の花漬」(豆腐滓)なするは面白し。

雑録

エリザベス、ロプーロフ（上）

無一生

魯西亞にロプーロフと呼はれたる一士官あり無辜の罪に坐して廣漠不毛のシベリヤへ放たれ其殘年を此毘るべき國の最も未開の地方に送るとなりけるが件の士官は此處に在りて有らゆる痛苦と有らゆる不自由を享け其妻及び娘と都合親子三人の生計の代にとて僅かに日に六錢の扶持を給せられけり。

士官の年若き娘なるエリザベスは父なる人の此上なふ太くも不幸に打沈める様なるを見て寔に身も世もあられぬ憂き思ひにてありしが父なる士官が身は自由を奪はれし籠中の鳥哀れ敢なき謫居の身となりて以來光陰に關守なく昨日と送り今日と過ぎ早や十四年の星霜を迎へし今日が日に至るまで最初も現時も同じ有様にて自個の境界に馴れ遣らす亦時々太甚く絶望の淵に沈めるとあるにぞエリザベスは玆に於て屹度心に思案を定め非凡にも亦勇壯なる思想を肚裡に孕みにけるが這は他なし魯都聖彼得堡に向つて旅立ちし魯國皇帝陛下に父の赦免を乞ひ奉らんがためとこそは知られけるが偖ても路程の遙けさ魯都聖彼得堡に達せんには父なる士官が月に恨らみ雪に喞ちつゝあるシベリヤの沙漠より千里以上もあるぞかし此廣大なる都府聖彼得堡には誰とてロプーロを識れる者もなく亦彼の運命に付いて誰とて痛痒を感ずる者もなく亦エリザベス親子三人の者は一エキューの貨幣だに有たさりき然はあれと

も此感ずべき少娘エリザベスは此等のことに毫も屈する色なく只管神の擁護に頼りて自個が計畫を實行することに思案の臍を固めけり。

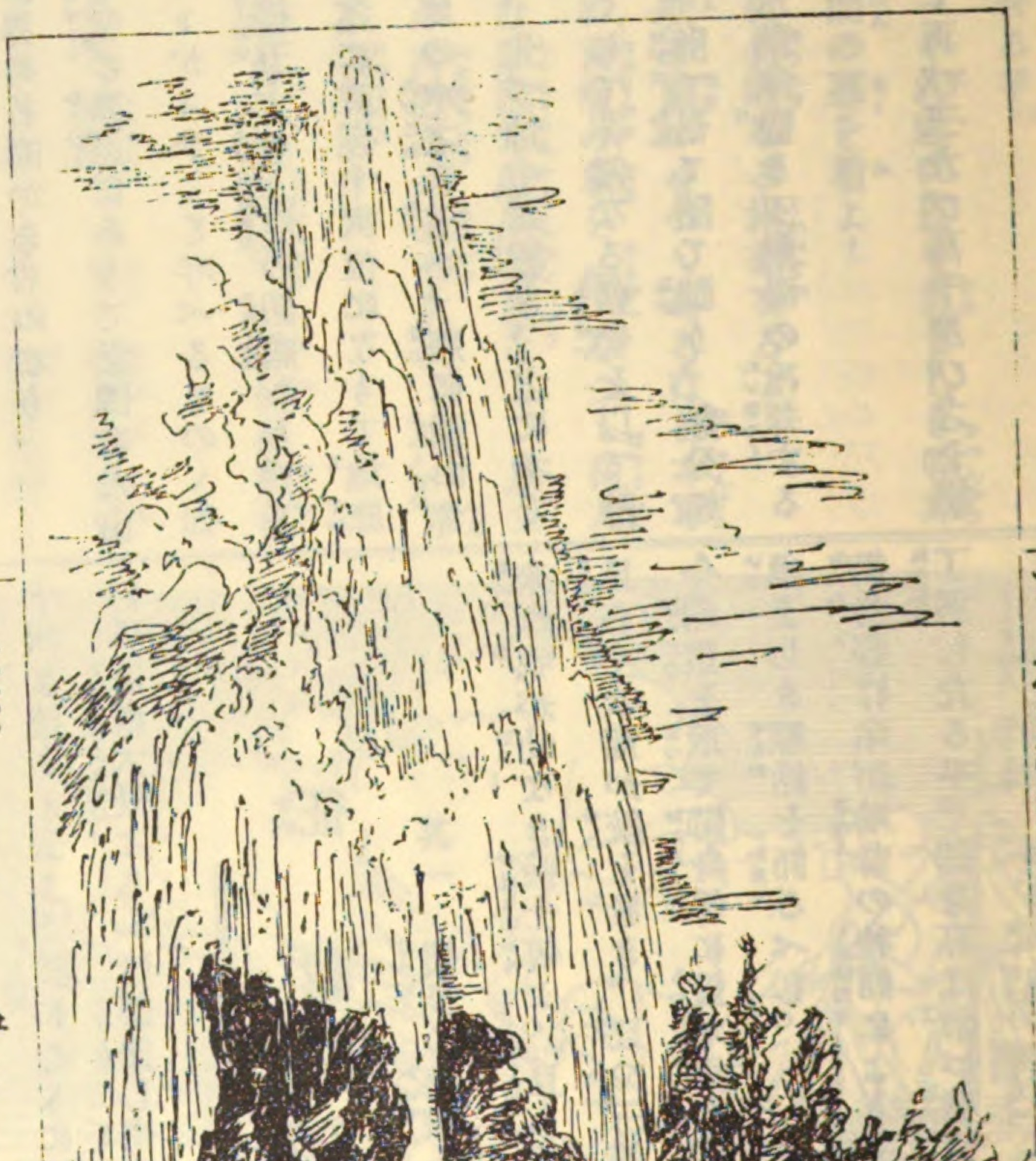
最初の程はエリザベスは躊躇ひて父に向つて自個の胸懷を打明け難しが終に氣を勵まして父に向ひ「偖父上よ妾は皇帝陛下に向ひ父上の御赦免を乞ひ奉らんため都府聖彼得堡に上らんと存じ侍るが哀れ願くは父上よ妾の此旅行を許るし給へ妾は神の擁護に頼りて妾の願事を首尾能く成就せしめ給ふを望み侍るなり」と思ひ設けぬ最愛の吾娘の言葉にロプーロフは呵々と打笑らひつゝエリザベスの手を取りて今しも食事の準備に餘念なき母親の傍に將て行き叫べる樣「聽き玉へ吾妻よ吉報のあるぞかし吾儕の有らゆる苦患も最早消滅の期に近づきしぞかし覽られよ此處に在はする豪らき貴女を貴女には吾儕を苦患より拯出さんとて遙々聖彼得堡に旅立ちし貴女自身面のあたり皇帝陛下に謁し赦免を乞ひ奉るの勞を取らんとせらるゝなり」とロプーロフの言葉に。

母親は那娘は吾儕に左る無益の戯言を言はんより那娘の仕事を爲す方増しならめ」と斯くて可憐の吾娘の打泣ける樣を見遣りて母親は笑ひながらエリザベスに接吻し一枚の布片を取出し少娘に示しつゝアナおぞましや何事を泣くぞかし先づ食卓を拭清めて後ちに皇帝陛下に拜謁のことはしも取掛りてよ」エリザベスは兩親が吾が打明かせし胸懷を好き笑柄となせしを見て最早吾が抱負を語らん樣もなくて居たりき然はあれどもエリザベスは造次顛沛だにコノ事を忘るゝ間とてはなく其祈を捧くる内には斷えず旅行の許可を吾父より得せしめ給へと神に念じける。



熱水飛騰の奇觀

雨の行衛を尋ぬるものは知らん、雨が地上に落下するや其一部は水蒸氣となりて發散し、其一部は地上を流れて洋海に注ぎ、他の其一部は地中に浸入するとを。而して其地中に浸入したるものは緻密なる岩層に逢ふて進路を遮斷せられ、流れ〳〵て遂に再び地上に出ることを。泉とは是なり。其中火山地方を構成する火成岩の下を竄流するものは、熱を受けて或は沸騰點を超ゆるもの珍らしからず。之を温泉といひ、其最も面白きは定時を以て熱湯を噴出するガイサーと呼ばる丶間歇温泉是なり。熱海に遊べる客は我が熱海温泉が亦一種の間歇温泉に



して晝夜六回噴出するものなることを知るべし。

氷洲、ニュージーランド、落機山中エルローストーンパークにあるもの等は世界に名高かきものなり。

氷洲の或るものは二千呎の高原にありて近傍に火山あり温泉あり。其グレートガイサーと呼べるもの丶如きは、低き岡にて上に直徑五十呎許の凹處あり、下方に向て漸く狹くなり、遂に直徑十呎位になりて地底に向へり。常時は八十二度の水之に湛へ、將に噴出せんとするや恐ろしき響き、先づ地中に響き、之に次で水蒸氣烈しく上騰し、暫くして非常なる猛勢を以て熱湯を噴き騰ること一百呎、隨て落ち隨て騰り、數分にして休憩す。是れ地中に水蒸氣盡き又熱湯の冷却するに由るなるべし。斯くて彼は若干の時を經て再び三たび萬千度び之を繰返すなり。

其のエルローストーンパークにあるものは更に幾倍の偉觀にして、就中ジァイアントガイサーの如きは直徑五呎の熱湯柱忽然として直立する三時間其高さ百四十呎に達すと云ふ。試にこゝに圖する所を看よ、其如何に壯觀大景なるかは想像し得て自ら餘りあるべし。

征戰幻燈

其一　豐島の海戰

來れ我が幼なき兵士等よ。且らく太郎が喇叭を止め、且らく次郎が銃を置き、且つ三郎が劒を室にせよ。我今幻燈を取て御身等に最も勇ましき戰狀を示し、最も勇ましき戰話を語るべし。

御身等は余が曩昔の物語によりて軍艦の何物なるやを了解したる乎。御身等は余が曩昔の物語によりて如何に巨丸を發射すべき大砲の艦中に載せられつゝあるやを記臆せる乎。而して此の軍艦が今三郎の着け居る如

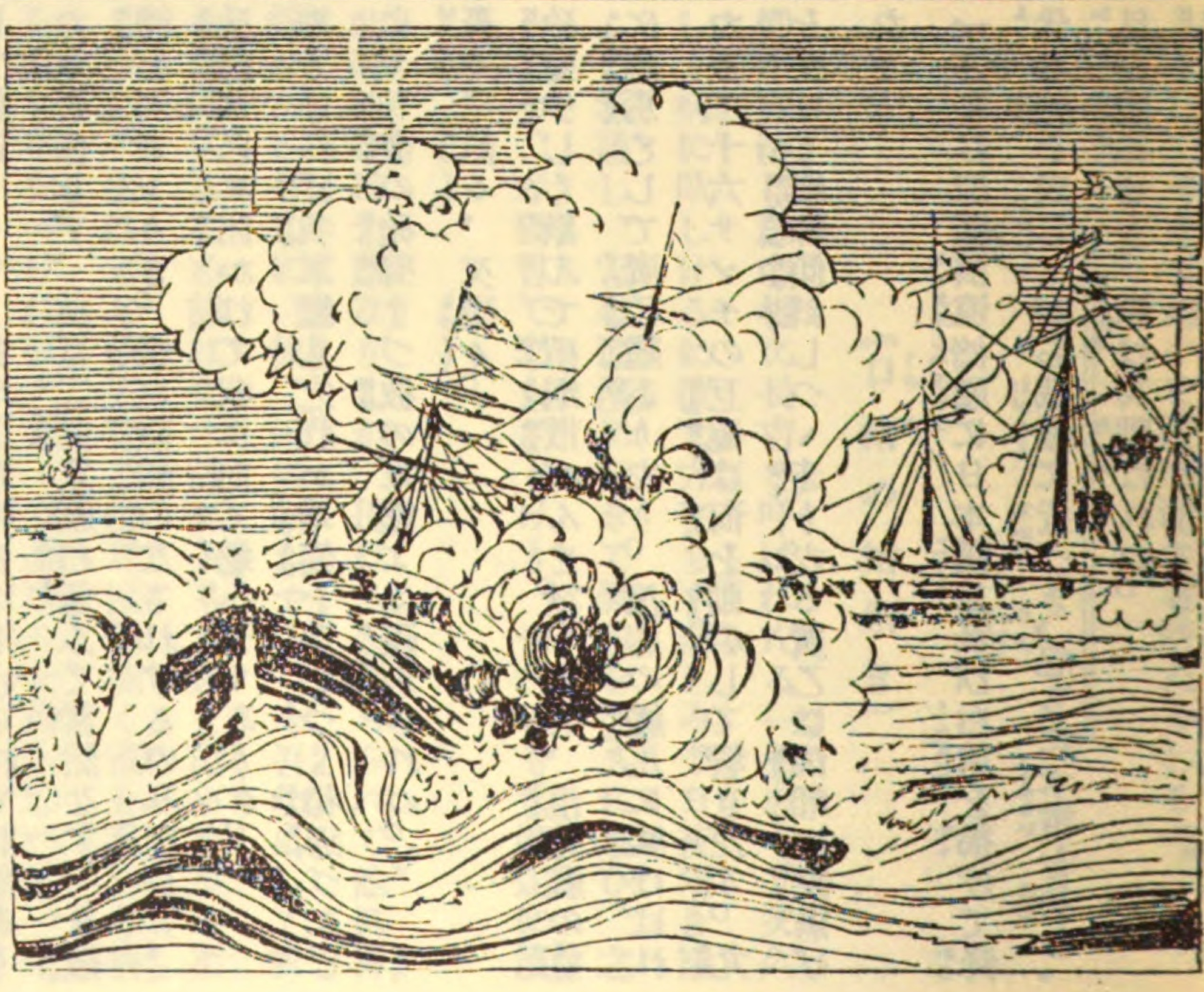
き制服を着けたる海軍々人に由て自由自在に運轉せられつゝあることをも記臆せる乎。

然らば余は御身等に示すべく此處に最も勇ましき物象を映出すべし。看よ！前面の幕を看よ！

おゝ！おゝ！おゝ！如何に勇壯なる繪畫なるよ。右方に旭日旗を檣頭に吹き靡かせつゝあるは日本軍艦浪速號なり。左の前方に黃龍の旗を飜しつゝ砲丸を受けて人飛び艦傾けるは清國軍艦廣乙號なり。是去七月二十五日朝鮮南陽灣の沖豐島の近海に於て我が軍艦が清國軍艦と海戰したる狀況なり。

靜まれ！靜まれ！且らく余をして此戰が如何に戰はれたる乎を語らしめよ。

抑此戰の起因を繹ぬるに、朝鮮——曾て御身等に地圖を示して物語りたることありたりし我が隣國朝鮮——の獨立を清國が危うせんとしたるより事起れり。朝鮮は日本の紹介を以て世界に獨立國と承認せられたる



ものなるが上、此國にして一旦支那の版圖に入ることありては我邦に不利なること少なからざるより、我邦にては清國が機を見て之を純然たる屬國の地に置かんとするを拒み、共に朝鮮の內治を改革し、以て其の獨立の實を擧げしめんと清國に申込みたりしなり。然るに清國は之を否みたりしより、去らば日本は日本一個にて之を致し申すべしとて着手したりしに、彼之を妨害せしを以て事こゝに至れり。

斯くて七月二十五日は來りぬ。余は曩に新聞紙を讀で知りたりし當日の實況を語るべし。

二十五日の午前第二時朝鮮國仁川の港に碇泊し居たる清國軍艦濟遠廣乙の二號は、暗を破て何れにか拔錨し去れり。同じく四時に我が軍艦芳野浪速秋津洲の三隻亦偵察の爲に南陽灣方面に向て進行しつゝありたり。」

午前七時海霧漸く霽るゝに當り、豊島附近に於て我軍艦の方面に向ひ來る濟遠廣乙の二艦を見たり。漸くにして相近づくや、我が芳野艦には揭げられて將旗ありたるに係らず、彼は二國軍艦相逢ふて當然なすべき敬禮をなさゞりき。啻に敬禮のなされざるのみならず、砲門は已に開かれて我に向て進みつゝありき。

斯りければ我軍艦も之れが準備をなしつゝ相近づきしに、一發の砲聲まづ彼の軍艦より轟かされぬ。

轟々、烈々、又濛々。

砲聲少しく歇んで硝烟散ぜんと欲する時、浪速艦の前に忽焉として廣乙艦ありたり。浪速の艦尾に裝ほはれたる二十六サンチの巨砲は海を動かして響きたり。丸を受けて艦躰傾斜しつゝ走りたる廣乙は淺瀨に乘揚げたり。

一方には清艦濟遠檣頭に日本國旗及び白旗を揭げて降伏の禮を表しながら我艦に近づき、忽ちに水雷を放ち、且つ發砲せり。戰は又戰はれぬ。

偶ゝ清國北洋艦隊の操江號一運送船を護して來れり。

秋津洲艦は之に當りぬ。
廣乙濟遠は此間に芳野浪速の爲に擊破せられ、廣乙は陸に向て淺瀨に乘上げ、濟遠は大破壞を蒙りつゝ全速力を以て島を廻り〳〵て清國の方面に遁去りける。
然るに此の運送船は英國滊船高陞號にして清兵千百人を載せたりし故、浪速艦は之に對して幾多の手續をなし、船長以下に下船を命じたる後、運送船が全く清兵の權力下に落るを見て、巨砲一響、船は見る間に巨濤を捲き上げて沈沒しける。
船長以下數人は我艦の救ふ所となれり。
此戰我に俘虜となりしもの、操江號乘組員艦長王永發以下八十餘人。沈沒船中に乘居たる清兵中四百四十七人は水深群島の最西にある欝島といへるに漂着したりと云ふ。
其中の大將四人にして、駱佩德、吳煥章、徐在天、漢納根といひしが、漢を除くの外は皆死しぬ。漢は獨逸人にしてハンチケンと呼び清の客將たりしもの。

長　吉

《口絵の絵解き》

備中國淺口郡中村に長吉と呼ばれたる一兒あり。父久しく病に臥しけるに彼大方ならず悲しみ、日夜附き添ふて看護し、常に海濱に行きて雜魚を漁人に請ひ、之を羞め、孝養曾て怠らざりけり。去れども父は遂に沒しぬ。
此時彼年は十歲なりしが、母は人に勸められて他に再嫁せんとせしに、彼、母に謂ふやう、今吾幼にして衣食を供すること能はず。故に人も再嫁を勸めまつるなるべし。去れども四五年を經なば吾能く家を興し孝養を盡し申すべければ、暫く我が成長を待ち給へと、之を諫むること再三なりき。

去れども母聽かずして彼を伴ひ往かんとしけるに、彼曰く、去らば吾は此家に留まり、如何にもして父の名を相續し申すべしと。彼が志容易に動かすべからざりければ、母は彼が弟を連れて再び嫁ぎぬ。

これより彼は父の靈位を櫃中に安置し、朝夕之を拜し食時には必ずまづ食を靈位に供するなど、恰も生者に事ふるに異らざりき。

後人の僕となりて此日を消しけれども、忌日に逢ふ毎に追慕の情極めて切に、又日常母を顧ることも厚かりし故、事領主に聞え、米若干を賞せられぬ。

時事一斑

學海の潮勢

各分科大學の入學者を見て現時に於ける學海の潮勢如何を察するに、法科猶其首位に居り、工科之に次ぎ、文科理科醫科農科之に次けり。而して年々增加するものは工科にして、法科醫科は次第に減少するもの、如し。知らず我邦が將に工業國たらんとするが爲めか。試みに下表によりて之が潮勢を察すべし。又地方によりて其好尙の同じからざるあるを見るべし。

	法	醫	工	文	理	農	計
第一高等中學校	三七	三〇	四五	一五	一四	〇	一四一
第二同	一	〇	三	四	五	〇	一三
第三同	二七	〇	二二	二六	一一	一	八七
第四同	八	〇	九	一	二	一	二一
第五同	二一	〇	五	八	三	四	四一
山口同	五	〇	六	一	一	〇	一三
鹿兒島同	二	〇	〇	七	〇	〇	九
學習院	四	〇	〇	〇	〇	〇	四
農科大學豫科	〇	〇	〇	〇	〇	一五	一五
計	一〇五	三〇	九〇	六二	三六	二一	三四四

學問普及の度幾許

最近八年間に於ける學齡兒童の就學數を檢するに、

種別／年別	學齡兒童 全數	就學 男	就學 女	不就學 男	不就學 女	學齡百中修學比例
明治十八年	六、四一三、六八四	二、一九五、六一七	九八六、六一五	一、二四一、三八六	二、〇九〇、一六六	四四、六二
明治十九年	六、六二一、四六一	二、一五三、七六七	九二〇、四一九	一、三三〇、〇二〇	二、二三八、二五五	四六、三三
明治二十年	六、七四〇、九二九	二、一一三、八五七	九二〇、三五九	一、三九六、九一五	二、三一〇、八九八	四五、〇〇
明治廿一年	六、九二〇、三四五	二、二七九、九七三	九五七、五一七	一、三三八、七五四	二、三〇四、一〇三	四七、三六
明治廿二年	七、〇七八、五六四	二、三八四、三六九	一、〇三六、〇五二	一、三三四、七九六	二、三四三、五四七	四八、一八
明治廿三年	七、一九五、四一三	二、四六八、三九一	一、〇五三、三三七	一、三一五、八三一	二、三五八、八六三	四八、九三
明治廿四年	七、二三〇、四五〇	二、五三四、四九三	一、一〇七、七五九	一、二五八、九四三	二、一二九、二五六	五〇、三一
明治廿五年	七、三五六、七三四	二、七九七、二五六	一、二五九、〇〇六	一、一〇六、四〇三	二、一九四、〇五九	五五、一四

就學者の數年々增加し、明治十八年に於て學齡兒童百人に付四十四人六二なりしもの、二十五年には上りて五十五人一四となれり。亦喜ぶべき現象なる哉。

健全なる躰力

學校の躰育は大に厭棄せられんとするものゝ如く、都會の學校は殊に然りと聞く。日本學生の躰力が次第に減少せんと欲する傾向あるは事實なり。然るに猶此くの如しとせば、邦家の前途大に憂ふべきものあるにあらずや。世の父母たり教師たるものは、健全なる心力が常に健全なる躰力に伴ふことを忘るべからず。

發明に關する小さき理想

千葉縣に於ける某小學校にて、先頃高等二年生に、現時の社會に於て如何なる發明を爲さば最も公益の德を完ふすべきやを問ひしに、男兒は答へていふ、天に昇る器械を發明す◎如何なる病氣をも治する藥を發明す◎永久死せざる法◎斬られても鐵砲で撃たれても死なぬ法◎電氣の樣にはやく行く法◎速かに田畑を耕す法◎鷄に年中卵子を產ませる法◎水中を旅行する器械。女兒は答へていふ、時計の如きものにて地震を豫知する法◎着物を縫ふに針を用ゐずして早くする法◎一時間に五六反づゝ機を織る法

亦以て小さき彼等が理想を察するに足るべし。

顧ふに、昇天器を發明せんと欲したる彼は日常天を仰で天上の不測をあやしみつゝ、ありし小さき理學的天文學的想像を有したりしものなるべく、何等の病をも治する藥を發明せんと欲したる彼は、病の爲になやまされたるものあるを知りしものなるべく、不死の法を知らんと欲したる彼は其家若くは知れる所に死者ありて極めて死の恐るべきを感じたるものなるべく、疾行法を知らんと欲したる彼は、遠き所より通學するものなるべく、神速なる耕耘術を知らんと欲したる彼は農家の兒なるべく、引續きたる鷄兒の產卵を望む彼は其家に鷄あるべく、水中を旅行せんと欲する彼は水に近き所に家するか若くは彼が通學の路に川あるべく、又地震を豫知せんと欲する彼女は先頃の地震に驚きたるものなるべく、縫ひ且つ織ることの速かなるを望む彼女等は其母が縫ひ且織るに勞苦するを知るものなるべき乎。要するに想像の根底は共に其境遇及び其嘗て最も深く感じたることにあるべしと雖、概して男兒は女兒よりも空大に、女兒は男兒よりも着實なるを見る。」世界の發明は常に斯る馬鹿らしき想像より門出するを知らずや。

敎科書撰定

云ふものあり、或縣にては敎科書審査委員を一室に置き、警察官を附して其動作に注目せしめ、僅少の時間にて之を審査せしめたりと。

地方廳高等官府縣參事會員若くは縣會常置委員尋常師範學校長同敎員尋常中學校長小學敎員に由て組織せらるべき小學敎科書審査會にして果して此の如き事あらん乎、我が敎育の爲め痛哭せざらんとするも得べからざるなり。

勤と儉

大なる日本作られんと欲して國事方に多忙なり。淸國に向ての戰は現に交へられつゝあるなり。此時に當

りて國民の最も務むべきは倹と勤とにあらずや。農夫の耕し、機婦の織る、猶軍士の血戰の如きのみ。恤兵可ならざるにあらず、献金可ならざるにあらず。然れども業に從ふて勤且つ倹に、以て租税を辨じ以て國力を強め以て大に興國の基をなすは、戰時の國民に於て更に大に急務となす所なりとす。而して勤の事たる、男子首として之を勉むべし。唯倹の事に至ては、大に婦人の力を用ふるを利とす。勉めよや國人。勉めよや國人。曩時の日本ならば正に是れ勤倹令の布かるべき時なるを知らずや。

戰時の慈善事業

兵費の献納、善し。然れども一種の御用金の如くなるは好ましき所ならんや。恤兵もとより善し。然れども其家族を救恤するの更に善きに如かんや。軍人門を出で丶必死を期す、山の如き贈遺も要する所なきなり。唯大に要するは負傷の日に於ける看護のみ。吾人は婦人の慈善事業として衛生隊を補助すべき看護婦隊の組織あらんことを望む。

朝鮮の社會的改革

朝鮮が今回我邦の助力によりてなしつ丶ある改革中家庭に關係あるものは、曰く、男女の早婚を嚴禁し、男二十歳女十六歳の後に始めて嫁娶を許す事。曰く、婦女の再嫁は貴賤とも其自由に任す事。曰く、嫡妾とも子なき時始めて率養を許し、舊典を申明する事。公私奴婢の典を一切革罷し、人口を販賣するを禁ずる事。

遠征教育隊

社會の根本的改良は教育より始めざるべからず。我が慈善教育者は、宜しく遠征教育隊を組織して大に新教

育を朝鮮に施して可なり。

囚人と書信

書信の多寡は親戚知人顧念の情の分量を意味し、親戚知人顧念の情の分量は移善改過の機の多少を意味す。囚人と書信との關係豈に少なからんや。

明治廿六年北海道集治監囚人にして發信するもの、在監四百人に付

樺戸	四八、一	空知	二九、四
釧路	五七、四	網走	六八、九

又發信者一人に付平均發信數

樺戸	三、四	空知	六、一
釧路	二、八	網走	三、七

吾人は未だ此の書信數が如何なる情況を以て移善改過に關係しつゝあるかを調査し得ざるを憾むのみ。

視力の遞減

長野縣尋常師範學校生徒の視力を統計したるに男生徒百四十九人中近視眼者十五名ありたりと云ふ。即ち十分の一の割合なり。而して之を學年別にしたるに、一年生三十四人中近視眼者〇、二年生四十八人中三人、三年生三十三人中五人、四年生三十四人中七人なりしと。恰も一學年を進む毎に二人の近視眼者を増すものゝ如し。事に教育衛生に從ふもの大に意を用ゐずして可ならんや。

無聲無烟火藥

信濃の人櫻井平吉氏無聲無烟の火藥を發明す。陸軍省之を試撿したるに成績良好なりと。軍器改良の爲め、科學進歩の爲め、亦大に喜ぶべき事ならずや。

土俗の研究

土俗の研究が史學人類學及び教育等の參考資料として要用なるは論ずるなきなり。

土俗會去る廿日府下富士見町明治義會講堂に開會せらる。蓋し東京人類學會員有志者の首唱に係ると云ふ。坪井正五郎氏土俗研修の利益を數へて曰く、(一)各地方住民所業の同異を知り、(二)如何なる有樣が存在し得べきものなるやを知り、(三)風俗習慣の起原變遷を推測し得べしと。

青山醫學博士

青山醫學博士は已に歸途にあり。吾人が喜びの眉を開て迎ふるを得るの日も遠きにあらざるべし。

世界の大都府

世界の都府中五十萬以上の人口を有するもの三十五、内十二は百萬以上の人口を有せり。

百萬以上の人口を有するものゝ中、四個所——英國倫敦、佛國巴里、獨逸伯林、墺太利維也納——は歐羅巴にあり。五個所——支那の廣東漢口漢陽及武昌を合したる市府、我が東京、支那の湘潭及び興安——は亞細亞にあり。三個所——紐育、費府、シカゴ——は亞米利加にあり。

而して其人口を算すれば、倫敦四百四十一萬五千九百五十八。巴里二百七十一萬二千五百九十八。紐育（ブルークリンを合す）二百三十五萬二千百五十。伯林（シヤルロッテンブルクを合す）百六十五萬五千六百五十三。廣東百六十萬。維也納百三十六萬四千五百四十八。漢口、漢陽及武昌は合計百二十萬。東京は百十五萬五千二百九十。費府は百十萬五千二百七十七。シカゴ百九萬九千八百五十。湘潭及興安は各々百萬。

世界の鐵道

一昨年來の統計によるに、世界鐵道延長は六十五萬三

千九百三十七キロメートル（キロメートルは我が九町十間）なり。

地球の周圍を四萬七千キロメートルとすれば、此の鐵道線を以て十六周するを得べし。地球と月球との距離を三十八萬四千四百二十キロメートルとすれば、此の鐵道線は幾んど往邊すべき長さなり。人工の大亦驚くべからずや。



明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行